

桜東畠遺跡

—高岡・福田地区ほ場整備事業に伴う発掘調査報告書—

桜東畠遺跡

2022年12月



桜東畠遺跡

—高岡・福田地区ほ場整備事業に伴う発掘調査報告書—

2022年12月

福崎町教育委員会

あ い さ つ

福崎町は古くから交通の要衝として栄え、周囲を豊かな山林に囲まれ、中央部を清流市川が流れております、その東西それぞれに市街地が形成されてきました。

平成 27 年度から高岡・福田地区は場整備事業に伴い、調査を実施してまいりました。このたび作成した本報告書は、市川西岸に位置する新たに確認された遺跡で、奈良時代の集落であることがわかりました。徐々に高岡・福田地区的状況が明らかになってきています。

このたび、令和 2・3 年度に実施した桜東畠遺跡の発掘調査成果をまとめ、報告書を刊行致しました。広くご活用いただき、みなさまにとって郷土の歴史・文化への理解を深めていただけ一助となれば幸いです。

最後になりましたが、調査にあたり地元関係者をはじめ、多くの方々にご理解とご協力を賜りました。厚くお礼申し上げます。

令和 4 年 12 月

福崎町教育委員会
教育長 高橋 渉

例 言

1. 本書は高岡・福田地区は場整備事業に伴って調査を実施した兵庫県神崎郡高岡字東畠に所在する桜東畠遺跡の発掘調査報告書である。
2. 調査は、平成 29 年度から試掘確認調査を実施し、令和 2・3 年度に本発掘調査を行った。調査は兵庫県中播磨県民センターの依頼を受けて福崎町教育委員会が実施した。
3. 経費は試掘確認調査については国庫補助金を充て、本発掘調査は事業主体者が負担し一部国庫補助金を充てた。
4. 本書に使用した方位は基本的に磁北で、標高は福崎町設定の基準点を使用している。
5. 令和 2 年度の発掘調査は有限会社松浦興業に、ドローン撮影と基準点測量は株式会社ジオテクノ関西に委託した。令和 3 年度は調査・測量・撮影を株式会社マツダ建設に委託した。
6. 本書に掲載した図のうち遺跡位置図は福崎町発行の都市計画図（1/10,000）を、調査区配置図は福崎町都市計画図（1/1,000）を編集したものである。
7. 執筆編集は樋口・梶・福永・原井川・常陰の協力を得て渡辺が行った。
8. 本報告に係る図面、写真、遺物等は、福崎町教育委員会にて保管している。
9. 調査・整理作業において多くの方々や機関にご指導・ご協力をいただきました。感謝します。地元桜区の方々、調査に参加いただいた方々、工事関係者の皆様には感謝します。

本文目次

Iはじめに	
1 調査に至る経緯と経過	1
2 分布試掘確認調査の経過と結果	1
3 本発掘調査の経過	5
4 整理作業の経過	5
5 周辺の環境	6
II 調査結果	
1 調査の概要	9
2 遺構	10
3 遺物	20
III おわりに	31

図目次

図 1 福崎町・桜東畠遺跡の位置	2
図 2 試掘確認調査・本発掘調査位置図	3
図 3 試掘確認調査実測図	4
図 4 桜東畠遺跡の位置と周辺の遺跡	7
図 5 桜東畠遺跡平面図	8
図 6 西壁土層断面図	9
図 7 遺構実測図(1) (SB01・SB02)	11
図 8 遺構実測図(2) (SB03)	12
図 9 遺構実測図(3) (SB04)	13
図 1 0 遺構実測図(4) (SB05・SB06)	14
図 1 1 遺構実測図(5) (SB07・SA01・SA02)	15
図 1 2 遺構実測図(6) (SH01)	16
図 1 3 遺構実測図(7) (SX01)	17
図 1 4 遺構実測図(8) (ST01・ST02・P23)	18
図 1 5 遺構実測図(9) (SX02・SK01・SD01)	19
図 1 6 出土遺物実測図(1)	22
図 1 7 出土遺物実測図(2)	23
図 1 8 出土遺物実測図(3)	24
図 1 9 出土遺物実測図(4)	25
図 2 0 出土遺物実測図(5)	28
図 2 1 SX01・SB05・SB06復元図	33
図 2 2 桜東畠遺跡・九蔵遺跡遺構復元図	34

I はじめに

1. 調査に至る経緯と経過

福崎町では高岡・福田地区においては場整備事業が計画された。事業地内には周知の埋蔵文化財包蔵地である観音堂遺跡・宮ノ前遺跡・前田遺跡・林谷遺跡・桜遺跡・狐塚遺跡が存在するが、それ以外の遺跡の存在も想定されたので、計画策定期段階から埋蔵文化財取り扱いの協議がなされた。通常の進め方で事業用地内の分布調査を実施し、その結果などから試掘確認調査対象地を確定し試掘確認調査を行い、遺構面が保全されない部分について本発掘調査を実施することとした。

調査はすべて福崎町教育委員会が主体となって行った。進捗実施にあたっては、事業主体である兵庫県中播磨県民センター姫路土地改良センターならびに福崎町農林振興課・土地改良区・地元と協議しながら実施した。調査にあたっては多くの方々の協力を得ました。感謝いたします。

2. 分布試掘確認調査の経過と結果

分布調査は平成 27 年度から開始したが、当該地域の分布調査は平成 29 年度 2 月から 5 月にかけて行った。福崎町作成の図（1,000分の1）を利用し、筆ごとに採集点数をカウントした。調査では分布調査成果に地形も考慮して、遺跡範囲を囲った。調査は玉田誠司・樋口 碧・渡辺 昇・梶 智美が担当した。分布調査成果をもとに試掘確認調査を行った。平成28・29年度に5期に分けて調査を実施した。当該遺跡部分は北工区を対象とした平成29年度に行った。耕作物の都合で麦作部分は9月に行い、10月に稲作部分を行った。詳細は福崎町文化財調査報告17・21で報告しているので、参照戴きたい。

桜東畠遺跡部分だけを略記すると、80G～83Gが該当する。10月17日（火）に試掘調査を実施し、81G～83Gではピット・落ち込みなどを検出し明瞭な遺構面を確認した。81Gは耕土・床土・暗黄灰粗砂・黒褐シルト質極細砂・褐細砂（地山）の5層から成り、地山面で遺構を検出している。桜東畠遺跡として遺跡登録した。80 G以西は洪水堆積が顕著で遺構面は確認出来なかった。遺跡を確認した東側2枚の水田は耕作しており、平成 29 年度に試掘調査が出来なかつたので、令和元年度に試掘調査を行った。令和 2 年 2 月 26 日に2ヶ所（101G・102G）の調査を実施し、溝・ピットを検出した。遺構面はあるものの東側に地形が下がっており、包含層は認められなかつた。洪水堆積も認められ、堆積土も厚くなっていた。遺跡範囲は県道までの部分と確定した。地山面が遺構面であることは西側と同じであるが、地表からの遺構面の深度は深くなっている。さらに盛土施工され、遺構面が十分に保全されることから101G・102G部分については本調査を行っていない。

平成29年度調査体制

調査主体	福崎町教育委員会
教育長	高寄十郎
社会教育課長	大塚久典
社会教育課副課長	福永知美
社会教育課主事	樋口 碧
埋蔵文化財専門員	渡辺 昇
整理作業員	梶 智美
整理作業員	福永明子



調査風景

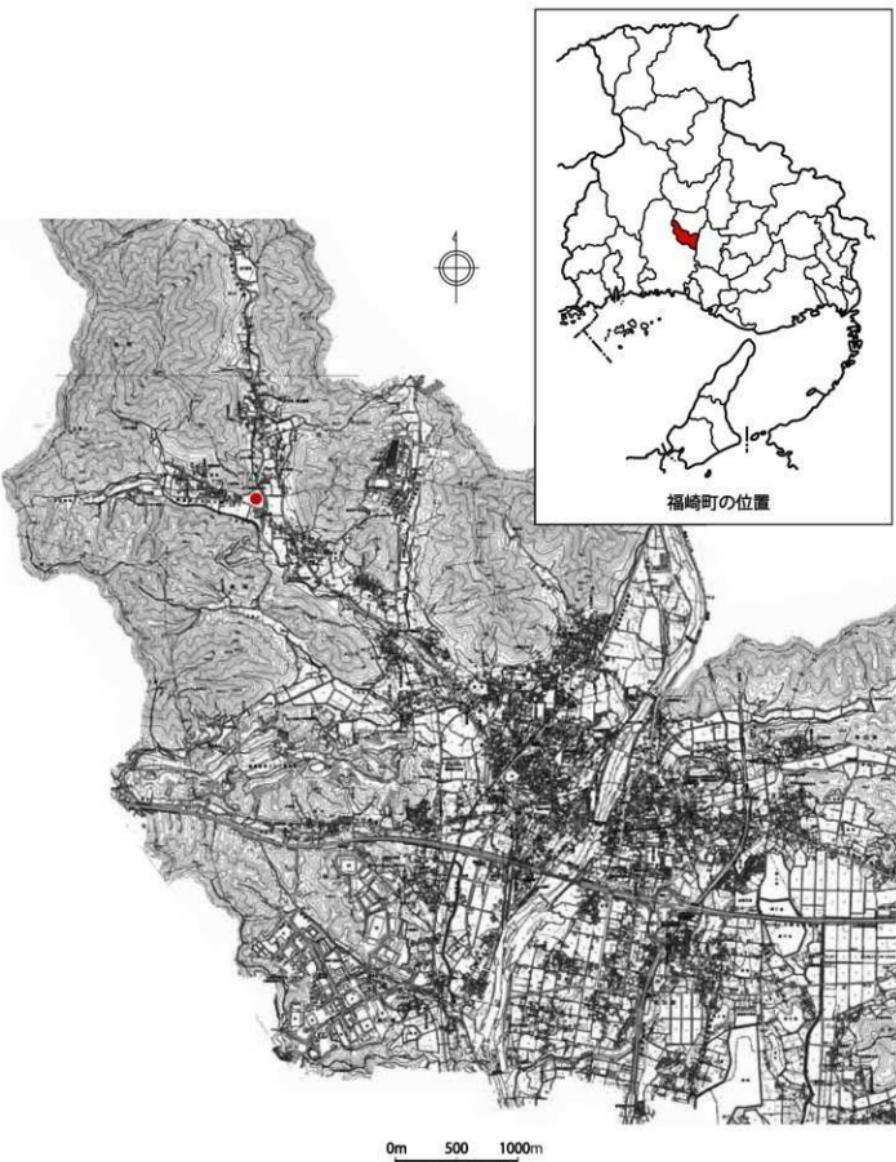


図1 桜東畠遺跡の位置

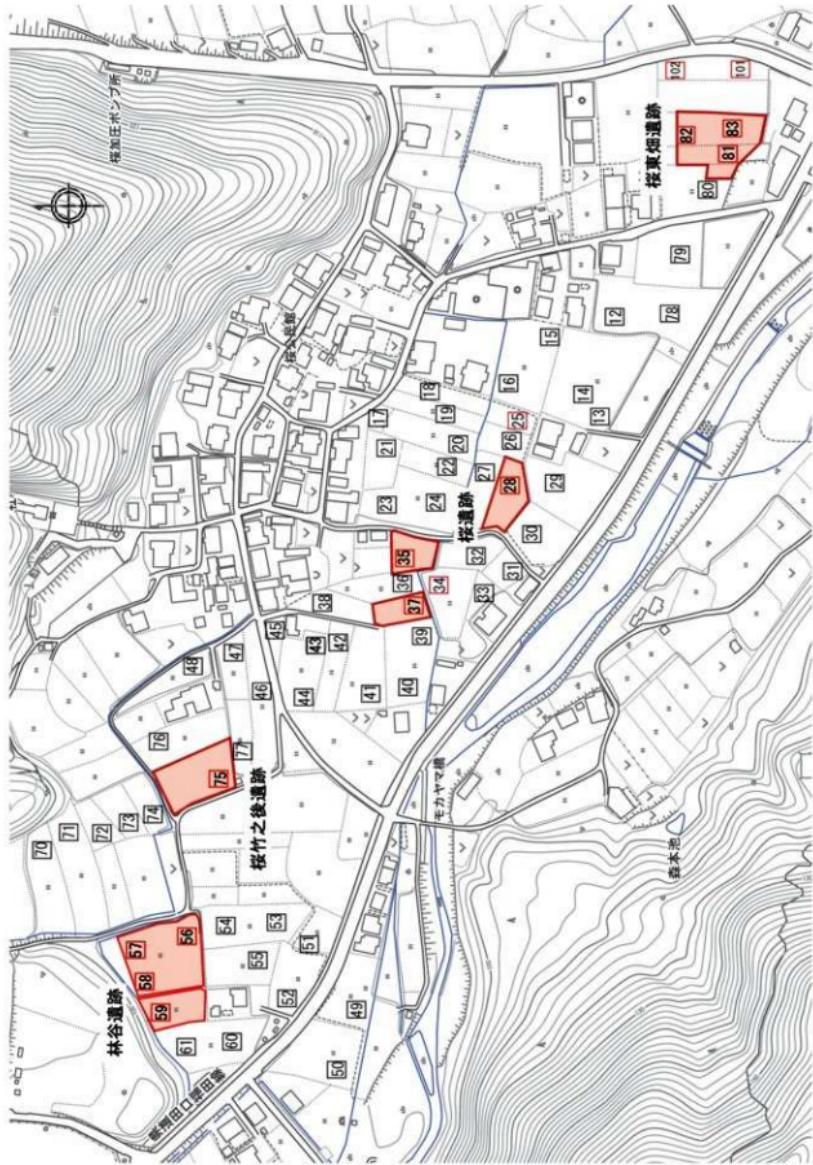
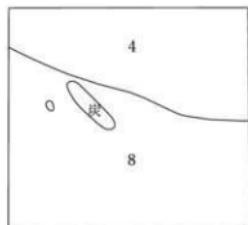
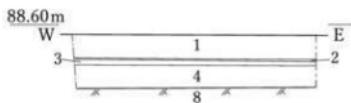
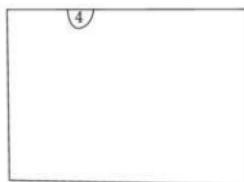


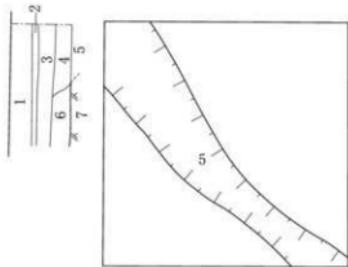
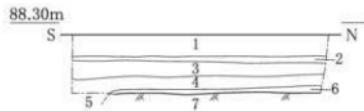
図2 試掘確認調査・本発掘調査位置図



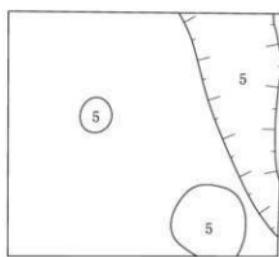
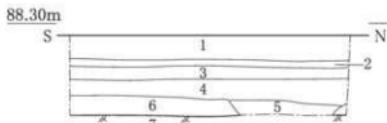
81G



82G



101G



102G

- 1 耕土
- 2 床土
- 3 暗褐 (10YR3/3) シルト質極細砂
- 4 黒褐 (10YR3/2) シルト質極細砂 (混合む)
- 5 黒褐 (10YR3/2) シルト質極細砂 (粘性強い)
- 6 にぶい黄褐 (10YR6/4) 砂礫層
- 7 黄褐 (10YR5/6) シルト質極細砂 (地山)
- 8 褐 (10YR4/4) シルト質極細砂 (地山)



図3 試掘確認調査実測図

3. 本発掘調査の経過

調査の方法

調査対象地は耕作地で主に水田であるが一部休耕地もあった。試掘確認調査の結果で調査範囲を決め、掘り下げは重機を用い、精査等においては人力により対応した。壁面の図化、写真撮影による記録を適宜行った。令和2年度は次年度も耕作を行うことから、埋め戻し作業も行った。

調査経過

試掘確認調査の結果、本調査が必要とされた地点について令和2年度と令和3年度に本発掘調査を実施することとなった。両年度とも兵庫県中播磨県民センターと福崎町教育委員会で委託契約を交わした。令和2年度の発掘調査工事は有限会社松浦興業に、ドローン撮影と基準点測量は株式会社ジオテクノ関西に委託した。令和3年度は株式会社マツダ建設に委託した。

令和2年度の調査は令和2年度本調査の最初に行い、令和2年7月1日(火)～8月30日(火)の間で実働32日間を費やして行った。調査面積は1,336m²である。ドローンと足場からの全景写真撮影・実測・断割り作業のうち、来季も耕作を行うことから埋戻し作業も行い調査を終了した。調査内容が明らかになった8月10日に現地説明会を開催し地元の方を中心に遺構・遺物を見て頂いた。

令和3年度の調査は桜遺跡3区に引き続いで実施した。平成3年6月22日(火)～7月14日(水)の実働10日間を費やして行った。調査面積は270m²である。平成3年度は本体工事が実施されることから埋戻し作業は行っていない。7月11日(日)に桜遺跡3区と合わせて現地説明会を開催した。

令和2・3年度調査体制

調査主体	福崎町教育委員会
教育長	高橋 涉
社会教育課長	松田直彦
社会教育課副課長	森 公宏
社会教育課係長	藤原 元
社会教育課主査	長谷川幸子
社会教育課主査	樋口 碧
埋蔵文化財専門員	渡辺 昇
整理作業員	梶 智美
整理作業員	福永明子
整理作業員	原井川奈美
整理作業員	常陰ひとみ



調査風景

4. 整理作業の経過

試掘確認調査・本発掘調査と並行して隨時整理作業も実施した。土器洗浄や遺構図の調整などの作業は令和2・3年度に行なったが、それ以降の作業と報告書刊行は令和4年度に実施した。経費は発掘調査と合わせて兵庫県中播磨県民センターと委託契約を交わして実施した。

1次調査・2次調査とともに現地説明会を実施したが、地元中心で開催したことから広く町民の方々に見えていただくことが出来なかった。1次調査資料については、令和4年2月5日～4月10日に福崎町立神崎郡歴史民俗資料館にて開催された令和3年度企画展「令和2年度埋蔵文化財発掘速報展」で紹介し、遺物・写真パネルを展示し、解説会も行った。2次調査資料も今年度同様に予定している。

令和4年度調査体制

調査主体	福崎町教育委員会
教育長	高橋 涉
社会教育課長	木ノ本雅佳
社会教育課副課長	森 公宏
社会教育課主査	長谷川幸子
社会教育課主査	樋口 碧
埋蔵文化財専門員	渡辺 昇
整理作業員	梶 智美
整理作業員	福永明子
整理作業員	原井川奈美
整理作業員	常陰ひとみ



現地説明会風景

5. 周辺の環境

桜東畠遺跡は福崎町高岡字東畠に所在する。福崎町域は市川の両岸に分かれて展開しており、市川の支流が流れ開析された谷を形成している。南側には隔絶はないが、他の3方向は地形的に隔絶しており、旧香寺町など旧神崎郡南半を含んだ地域が盆地となっている。桜東畠遺跡は市川西岸に位置し、周辺の丘陵は地質構造では丹波帯に属している。南側の中国自動車道沿いに断層があり、東西方向の交通路となっている。前田遺跡の北側にも大内川沿いに断層が存在するようである。谷地形は河川によって開析されたもので谷底平野になっており、周辺部は段丘である。桜東畠遺跡は低位段丘にあたり、周辺の低地は氾濫原である。

福崎町では旧石器時代からの遺跡・遺物が確認されているが、市川西岸では縄文時代からの遺跡が知られている。高岡地区では桜の林谷遺跡で、石匙などの石器が採集されていたが最近の調査で落とし穴が検出されている。弥生時代の遺跡も市川西側は明確でない。駅前の中溝遺跡で中期の溝が、山崎の朝谷遺跡で後期の土器棺が出土している。終末の土器が宮ノ前遺跡・福田東田黒遺跡・西治下代ノ下モ遺跡や福田町田、馬田スガキで採集されている。西治下代ノ下モ遺跡では古墳時代になると集落を形成する。後期に製塙土器を保有している点も注目される。古墳は福崎町内で確認されているが、古相の古墳は高橋にある。高橋古墳群で早い段階に鉄剣が出土したことで知られている。箱式石棺を主体部とする6基以上の小円墳で構成される。今のところ福崎で最も古い古墳と考えられている。市川西岸で次の古墳は山崎所在の大塚古墳である。30m前後の円墳で、長さ12mを超す大型の横穴式石室を主体部としている。土器棺を出土した地点の隣接地に朝谷古墳群が築かれる。大塚古墳に続く時期の大型の石室を保有する1号墳（狐塚）が残存している。神谷古墳も近い時期の古墳であるが石室の高さが低くなり石室長が長くなっている。空間的には狭くなっている。末期の様相を示している。福田には東大谷古墳・宮山古墳・上垣内古墳・小山古墳の横穴式石室を主体部とする古墳があり、高岡には塩田山東2号墳・塩田山東古墳（桜谷古墳）・五郎が谷古墳が、山崎には馬ウ子古墳群や石棺出土古墳（山崎古墳群とされるが位置不明）、西治には三昧谷古墳群・数可ノ古墳、高橋には佐本古墳が存在する。奈良時代の遺構は矢口遺跡の掘立柱建物だけであったが、最近の調査によって高岡の各遺跡で調査されている。遺物は宮ノ前遺跡・觀音堂遺跡などでも確認されている。中世の遺物も同様で広範に各地で採集されている。

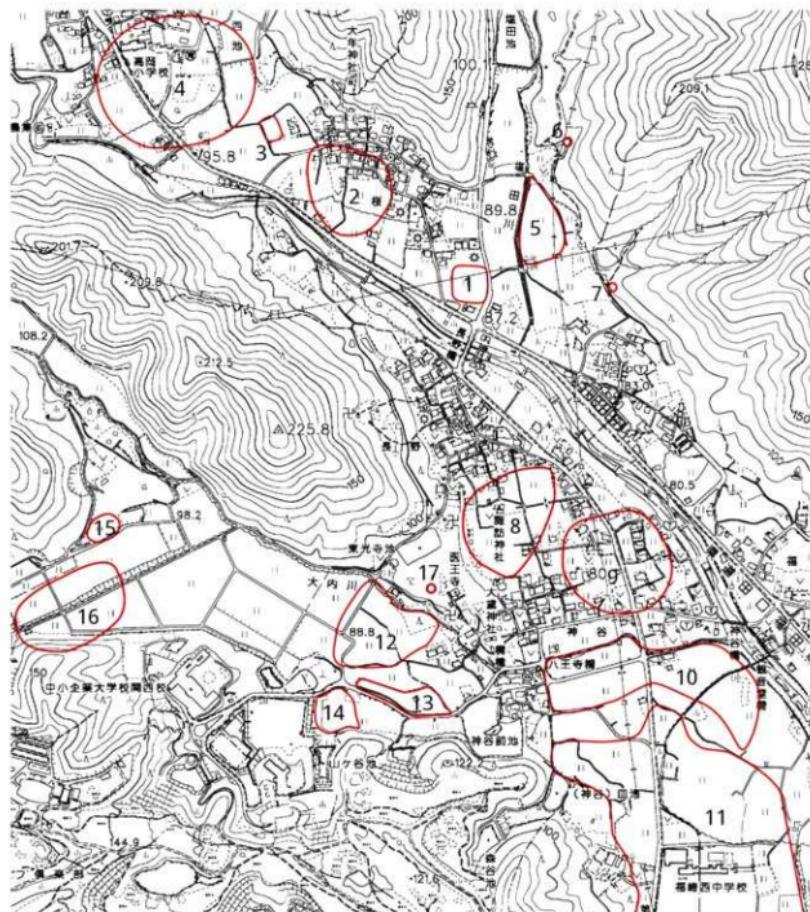


図4 桜東畠遺跡の位置と周辺の遺跡

- | | | |
|----------|--------------|--------------|
| 1 桜東畠遺跡 | 2 桜遺跡 | 3 桜竹之後遺跡 |
| 4 林谷遺跡 | 5 狐塚遺跡 | 6 塩田山東2号墳 |
| 7 塩田山東古墳 | 8 長野諒訪神社周辺遺跡 | 9 下々通遺跡 |
| 10 観音堂遺跡 | 11 宮ノ前遺跡 | 12 神谷ヤブノハナ遺跡 |
| 13 前田遺跡 | 14 長野多イ谷遺跡 | 15 雨田遺跡 |
| 16 矢口遺跡 | 17 神谷古墳 | |

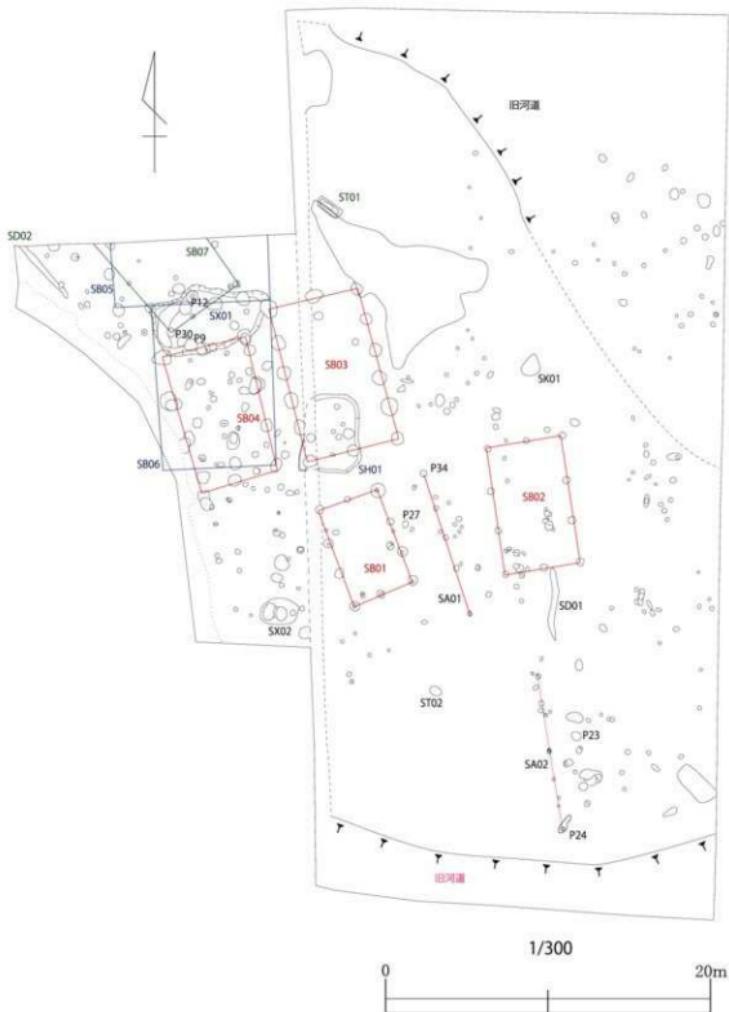


図5 桜東畠遺跡平面図

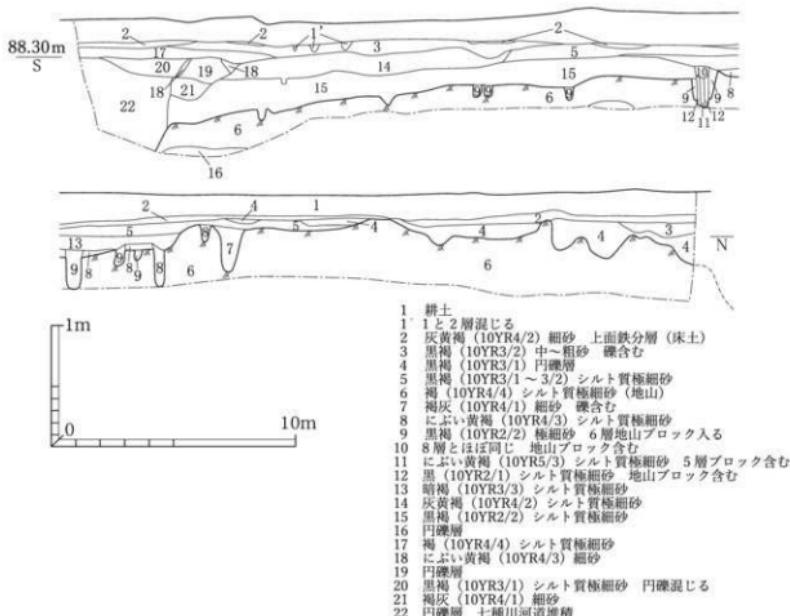
II 調査結果

1. 調査の概要

調査は基本的に1面で行った。ただ、南東部分を中心に鋤溝の耕作痕を検出した。主に東西方向に鋤溝が見られる。その後、南東部分を掘り下げたところ、耕作痕だけが新しい遺構であることが確認された。南東部分に限って2面で調査を行い、他は1面で調査を行った。上面の遺構は鋤溝だけである。大半の調査は下面であり、検出した遺構は竪穴住居・掘立柱建物などで飛鳥時代から奈良時代の遺構である。遺物は弥生時代から近世までと幅があるが、鋤溝と南東部のピット以外は奈良時代の遺構と考えている。

基本層序は第1層耕土・第2層床土の下に、にぶい黄褐橙極細砂があり、上面に鉄分が堆積している。第2層は床土である。その下が南北は遺構面である地山（黄褐極細砂）になっている。鋤溝を除いて遺構はすべて地山面で検出した。北側から南東部分には床土の下ににぶい黄褐黒褐砂礫層（円礫）が存在する。ある時期の七種川の洪水堆積層である。東側ではこの面でも遺構を検出している。同一遺構面だとすると、この七種川洪水の時期は飛鳥時代以前と思われる。

調査年度は2年度にまたがるが、同一遺構も継続して調査しており、合わせて報告する。



2. 遺構

検出した遺構は、竪穴遺構・掘立柱建物・柵・溝・墓・落ち込み・土坑・ピットである。遺物は弥生時代後期から近世のものが出土しているが、大半は奈良時代の土器である。

竪穴遺構（SH01）は調査区中央西壁沿いで検出している。調査区西側に延びていたが拡張し全体を調査した。南北 4.8m、東西 3.8m の隅円長方形プランである。床面でピットを 7 基検出しているが、径の大きな 2 基は竪穴遺構のものではなく、それ以降の掘立柱建物に伴うものである。残り 5 基のピットは径 0.2m 前後と小形である。上屋構造は復元できない。床面中央から北壁近くまで広く焼土が認められた。断面は中央が高い亀甲形を呈しており、厚いところで 0.15m を測る。下には炭屑も認められ、竪穴遺構全体に焼土が広がっている。住居ではなく工房であろうと考えられる。磁石を当ててみたが砂鉄などは付着せず、床面から鉄片なども確認されていない。中央から南東西部分では炭化材が広がっており、最終段階は上屋が焼失した可能性が高い。

掘立柱建物（SB01～07）は 7 棟確認した。主軸方向から 5 種に分かれ。①南北を主軸とする SB05・06 と ②N10.W の SB02 と ③N15.W の SB03・04 と ④N25.W の SB01 と ⑤N45.W の SB07 の 5 つである。①から順次変化していくものと思われるが、②～④は大きな時期差はないものと思われる。切り合い関係からも大きさは①と②～④と⑤の 3 期に分けられる。確実に①～④は奈良時代の範疇で収まるものと思われるが、⑤はどこまで下るか明らかでない。SB05以外はすべて南北棟である。

SB01は 2×3 間の側柱建物である。主軸方向は N25.W で東西 4.0m、南北 6.3m である。建替えは認められない。柱痕跡は 0.25m が多い。掘り方は北東隅の柱穴が大きく最大で 0.9m を測る。

SB02も 2×3 間の側柱建物である。主軸方向は N10.W で東西 4.8m、南北 7.8m である。柱掘り方は 0.4～0.5m で柱痕跡は 0.15～0.25m を測る。同じ 2×3 間の側柱建物であるが、SB01の方が掘り方や柱の規模は大きいが、建物の平面規模（柱間）は狭い。

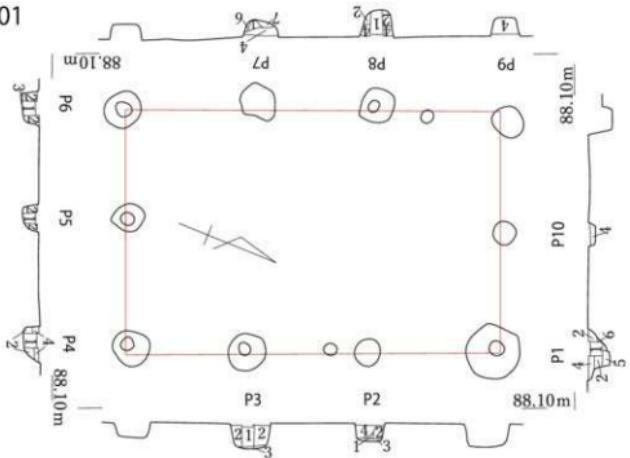
SB03は 2×5 間の側柱建物である。南北棟で東西 6.0m、南北 9.8m を測り、主軸方向は N15.W である。北西隅の柱穴で建替えを確認しているが、SB03の建替えでなく、下層の柱穴は SB05 の柱穴であろうと思われる。ただ、東辺の柱穴には柱痕跡が底面でなく、一部埋めた面から上に確認しているので建替えがあった可能性が高い。柱穴底に礫を入れるものが多く、東辺の 2 基は礫敷が顕著であった。掘り方の最大長は 1.1m を測り、平面形は不定円形である。柱痕跡は 0.25～0.35m を測る。主軸方向はやや異なるが、SB01の西辺と SB03の西辺もほぼ通っている。

SB04は SB03 の西側に並列して位置する建物で、主軸方向も同じ N15.W である。東西 2 間の 5.0m、南北 3 間の 8.2m を測る南北方向の側柱建物である。SB03とは南辺を揃えている。柱穴は最大長 1.2m を測り、掘り方は不定形で長辺の方向性はない。方形に近い掘り方もあるが、大半は方向性がなく片側に広がっている。柱痕跡が肩部まで延びるものはなく、柱を切るか抜き取っている。柱穴の切り合いがあることと、柱痕跡の色調が 2 種あることから、建替えがあったと思われる。柱痕跡は 0.3m 前後である。東辺の 1 基（P51）は柱痕跡の下に礫を敷いている。

SB05は真北に主軸を探る側柱建物である。南側に接する SB06 と一緒に建物の可能性もある。西側に旧河道があり削平され、北側を含めて残存状態が悪い。東西 5 間で、南北 2 間以上と思われる。南東隅の柱穴は SB04 の下層で確認した柱穴と考えている。長さは東西 9 m で南北は 4.2m 調査している。北側の残存状況から考えて大きく北へ延びるとは思えず、 3×5 間の東西棟の可能性が高い。

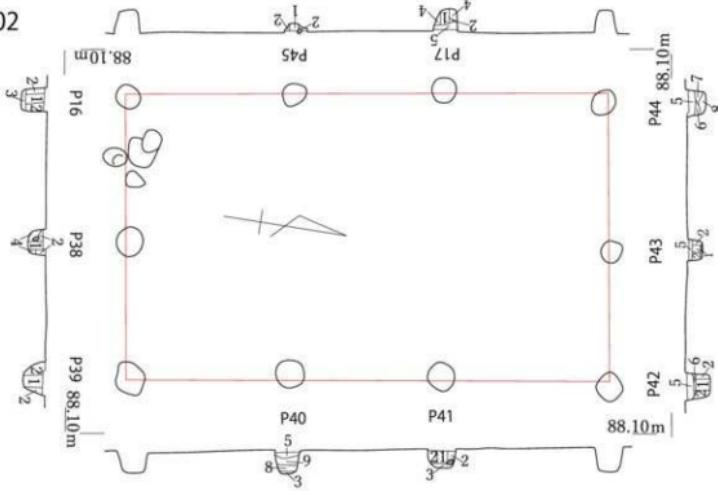
SB06は SB05 の南側にあり、同一の建物の可能性もある。主軸は同じく正方位を探る。東辺が直線になっており、北辺が SB05 南辺になっている。東西は 4 間と間数を 1 間減らし 6.8m を測る。

SB01



- 1 黒褐 (10YR3/1) シルト質極細砂
2 褐灰 (10YR4/1) シルト質極細砂 (地山土混じる)
3 褐灰 (10YR4/1) シルト質極細砂 (地山土多く含む)
4 黒褐 (10YR3/1) シルト質極細砂とくびい黄褐 (10YR4/3)
5 黒 (10YR2/2) シルト質極細砂
6 褐 (10YR4/6) シルト質極細砂 (地山土客土)
7 灰黄褐 (10YR4/2) 細砂
細砂の混じった層

SB02



- 1 黒褐 (10YR3/1) シルト質極細砂
2 黒褐 (10YR3/2) シルト質極細砂 (地山土混じる)
3 褐灰 (10YR4/1) 細砂
4 黑褐 (10YR2/2) 細砂 (地山土・灰混じる)
5 黑褐 (10YR2/2) と褐灰 (10YR4/1) 細砂が混じった層
6 2層と似るが地山土少ない
7 褐 (10YR4/4) (地山土客土)
8 黑褐 (10YR2/2) シルト質極細砂と地山土
褐灰 (10YR4/1) 細砂混じる - 4層に似る
(地山土4層より多い)
9 5層に地山土・灰混じる



図7 遺構実測図(1) (SB01・SB02)

SB03

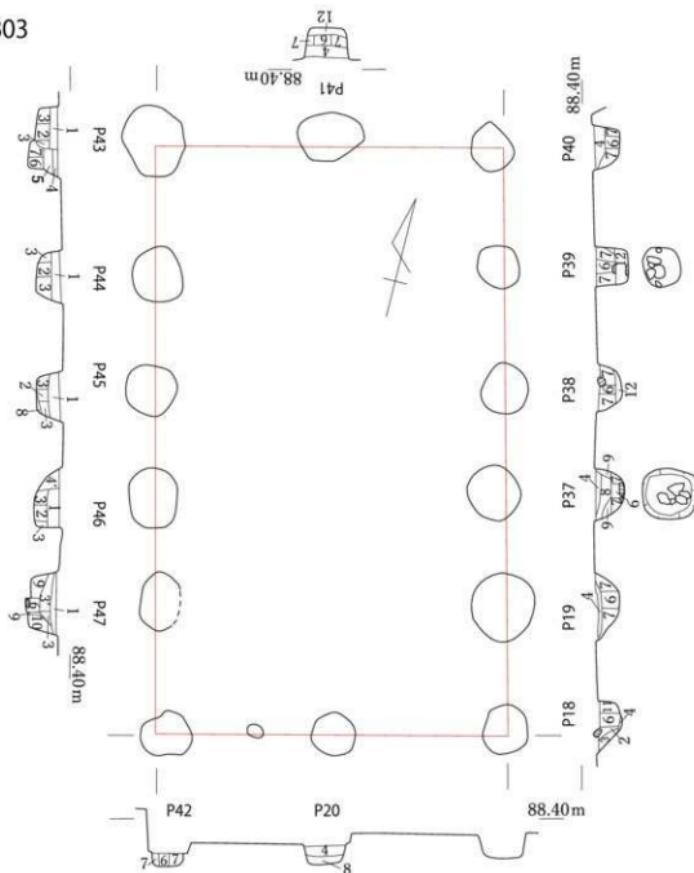


図8 遺構実測図(2)(SB03)

SB04

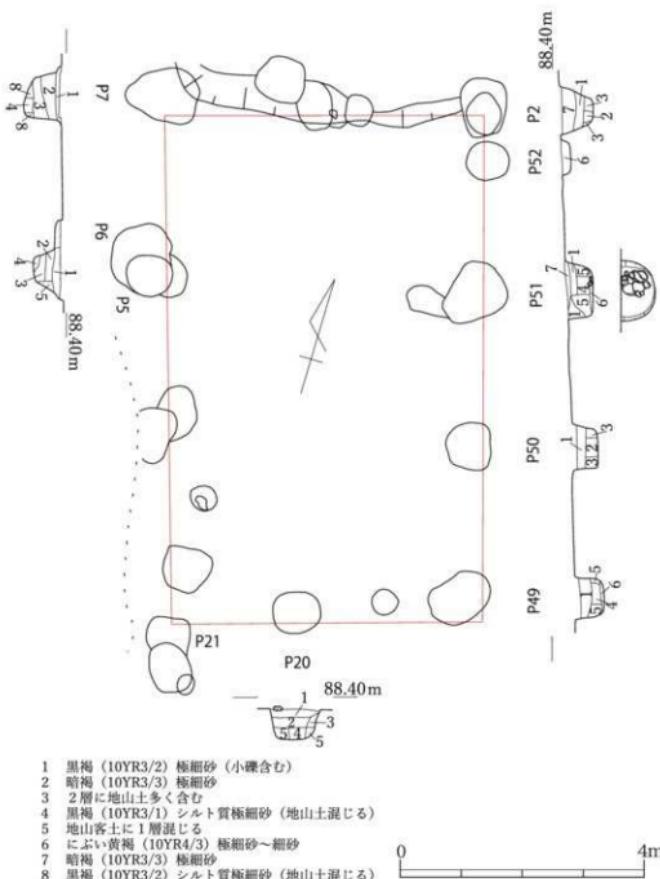


図9 遺構実測図(3)(SB04)

北辺は4間であるが、南辺は3間と思われる。北辺は柱間が狭く建物構造によるものと思われる。間数は多いが東西方向が桁行と思われる。北辺の柱穴の深さは0.4~0.45mでSB05の南西隅の柱穴が深さ0.55mあることと比べるとやや浅くなっている。南北は3間で10.2mを測る。南北棟で東西辺の柱穴は0.6m前後と深い。南西部部分は洪水堆積によって削平されている。SB05と一緒に建物でないとすれば、北側に延びている可能性もある。その場合、SB05が古く同一主軸で切り合い関係があることになる。

SB07は調査区西北部にあり、SB05やSX01と切り合い関係にある最も新しい時期の建物である。主軸方向はN45°Wの棟行3間の5.1m、桁行3間以上の側柱建物である。調査した桁行の規模は6.6mである。

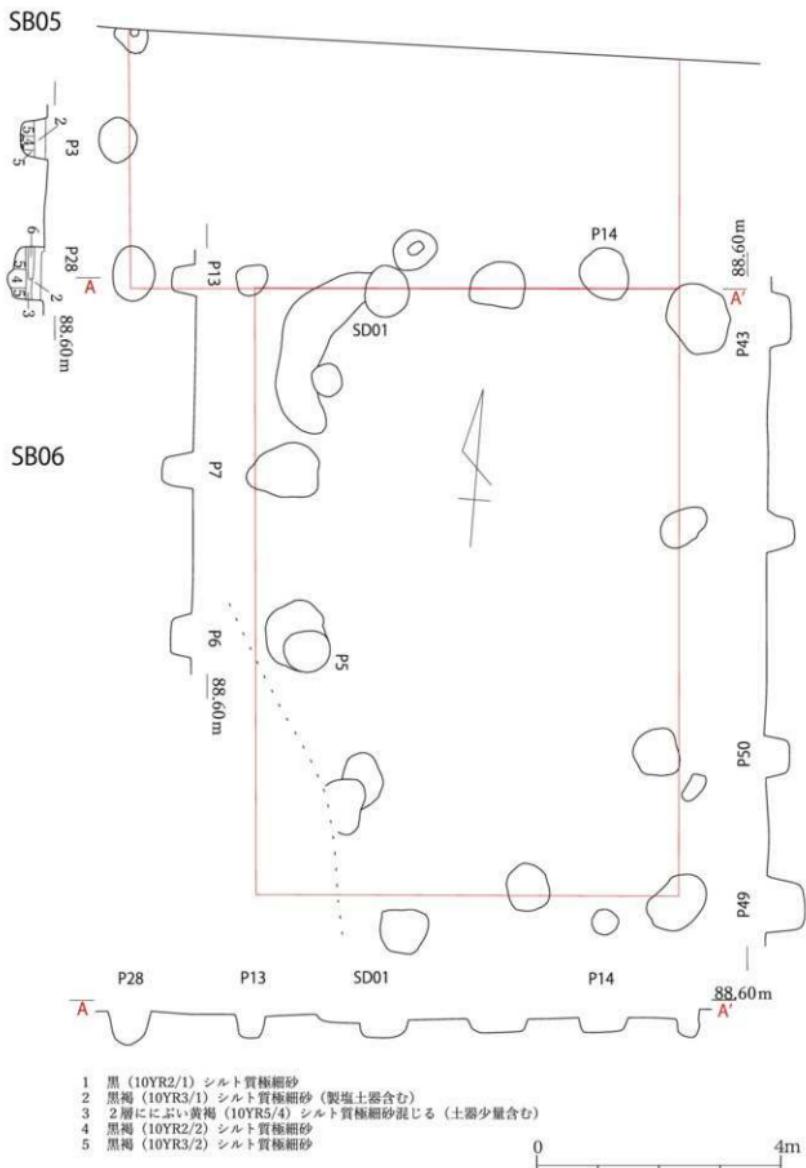
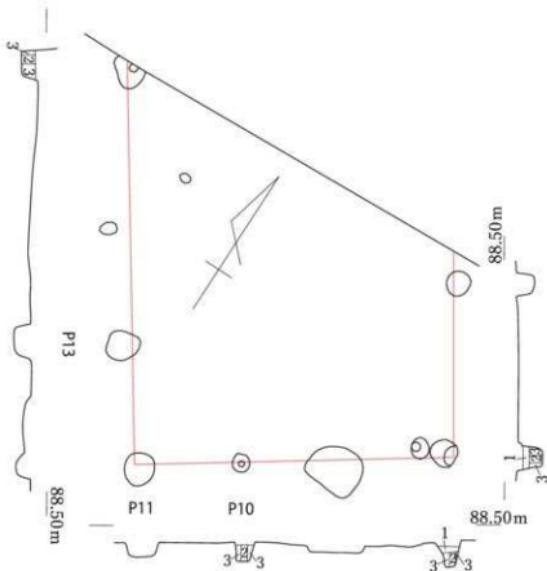
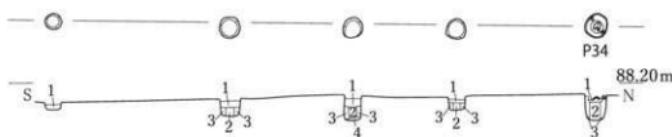


図 10 遺構実測図 (4) (SB05・SB06)

SB07



SA01



SA02

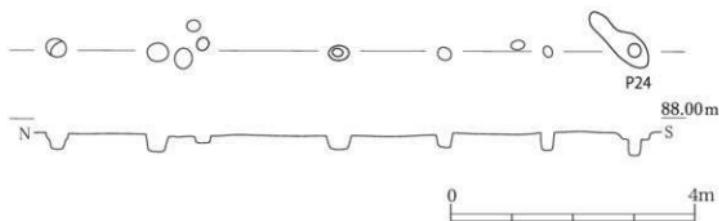


図 11 遺構実測図 (5) (SB07・SA01・SA02)

SH01

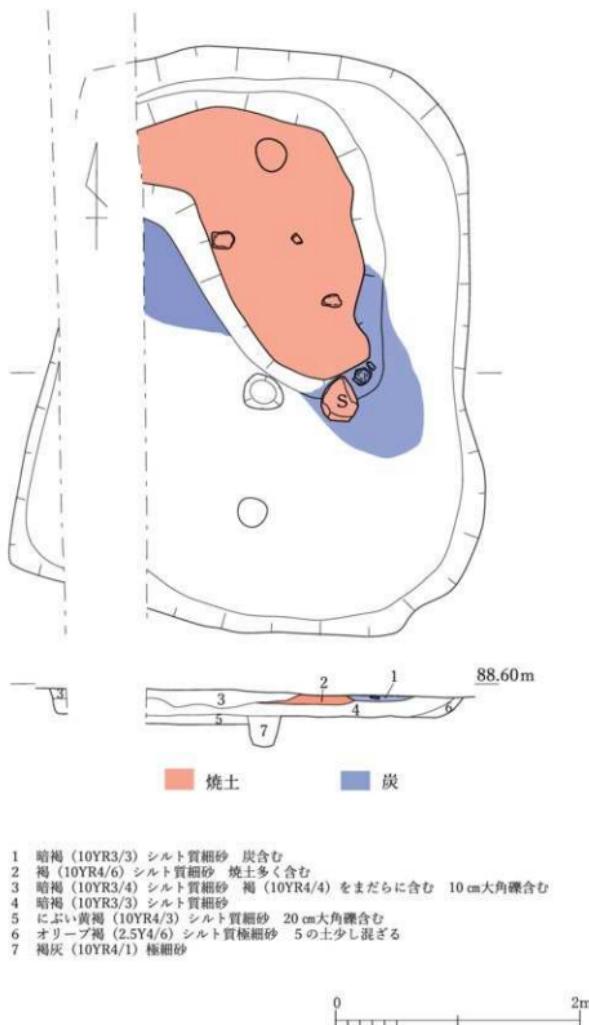


図 12 遺構実測図 (6) (SH01)

SX01

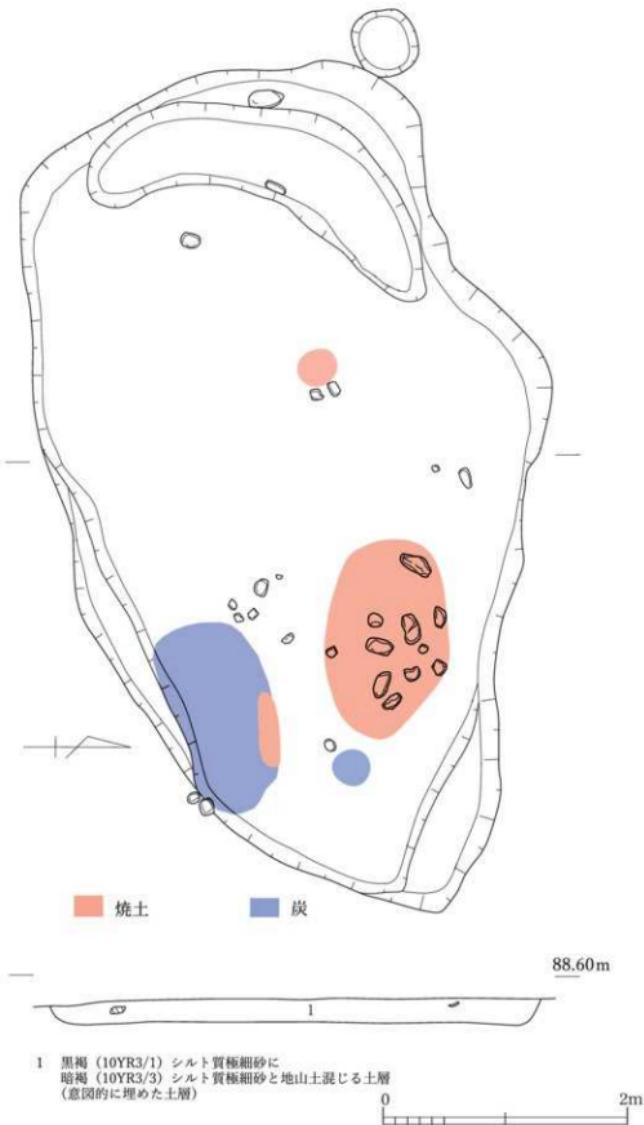
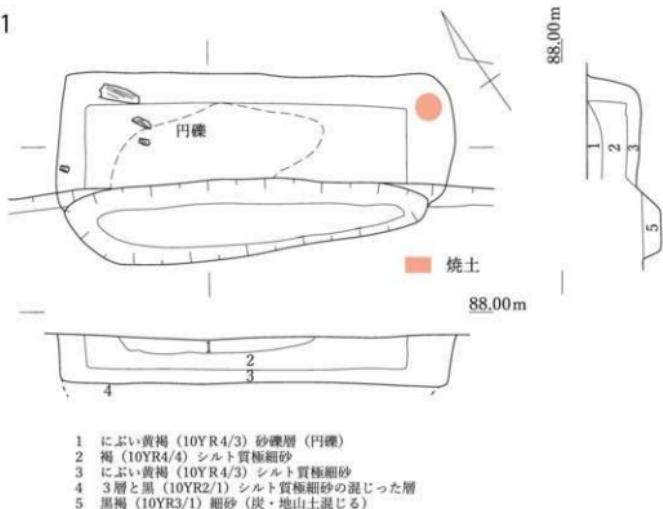


図 13 遺構実測図 (7) (SX01)

ST01



ST02

P23(焼土 Pit)

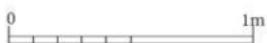
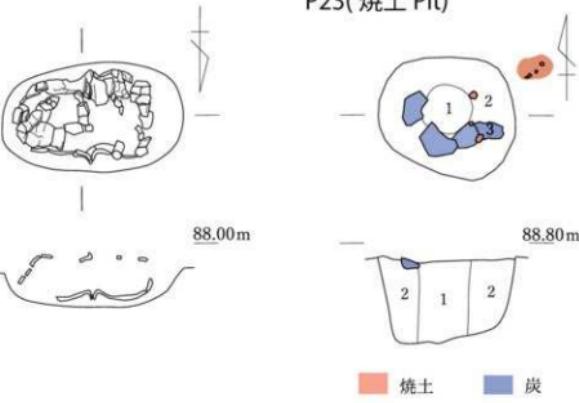


図 14 遺構実測図 (8) (ST01・ST02・P23)

柵 (SA01~02) は2列検出している。SA01は4間、9.2mを調査しているが、柱間は同一ではない。北端が SB01 の北辺と同じで主軸方向も同じなので、SB01に伴う柵と思われる。下で0.2~0.25mの柱痕跡が認められ、柱の上を切っている。北端の柱穴は切った柱根を切った上部に土師器甕が出土している。SA02は調査区南東で検出した南北5間の9.6mの柵である。主軸方向がN10°WであることからSB02と同じ時期で、SB02もしくは同時期の別建物に関連する柵であろうと思われる。南端の柱穴は切り合い関係があり、新しい時期のピットから木簡が出土している。深さは木簡出土のP24が0.4mと最も深く、他は0.2~0.3mである。

溝 (SD01~02) は2基調査した。SD01は調査区中央のSB02の南側で検出している。SB02棟行中央柱東側に接しており、主軸方向も同じことから同時期の遺構かと思われる。直線でなく緩やかに弧を描いており、幅0.25~0.5m、深さ0.15mで長さ4.2mを測る。SD02は調査区北西部にある。西側を旧河道の礫層が広がっており、自然の溝の可能性もあるが、主軸方向がSB07と同じN45°Wであることから、建物に関連する溝かと思われる。長さ4.2mを調査しており調査区北西側に延びている。幅は0.2~0.4m、深さは0.15~0.3mを測る。

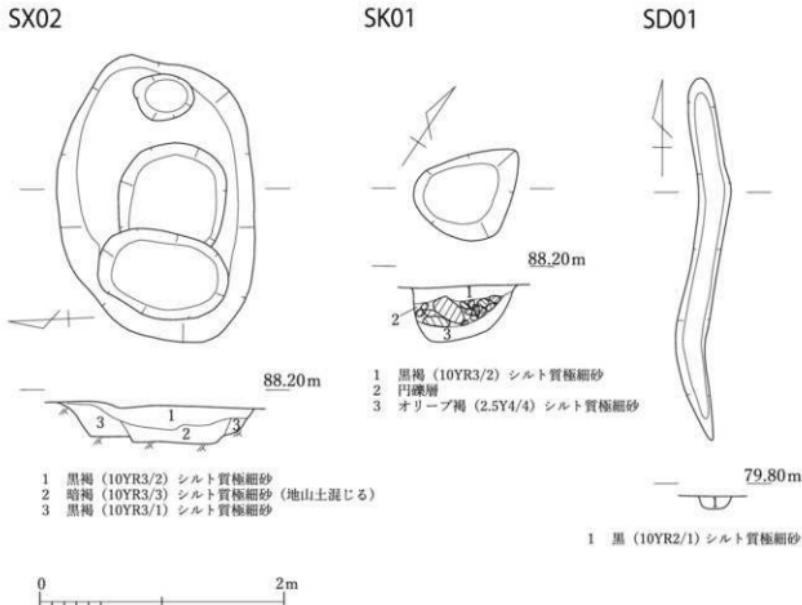


図15 遺構実測図(9)(SX02・SK01・SD01)

墓（ST01・02）は2基調査している。ST01は調査区北側で検出しており、南西部を洪水によって削られている。木棺墓と思われる。主軸方向はN50°Wで短辺0.6m長辺1.8m、深さ0.3mを測る。副葬品は保有していない。埋土に焼土・炭があり、下面にも焼土が認められた。調査段階では火葬墓かとも考えたが、棺が明瞭に検出されたこと、底面に通気孔が存在しないこと、側面の被熱痕跡が不明瞭なことから土葬と思われる。ST02は調査区南側で確認した合わせ口の土器棺墓である。土師器長胴甕2点を使用している。南北0.4m、東西0.65mの楕円形の掘方に甕2点を口縁部を合わせてほぼ水平に据えている。墓は2基とも遺構部分の両端に構築されていることから、集落隣接地に埋葬する意識があつたものかと思われる。

落ち込み（SX01～02）は2基検出している。2基とも令和3年度調査で確認している。SX01は東西に長い不定形の落ち込みである。南北4.2m、東西7.0mの最大長を測る。西側は弧状で東側はすばむ平面イチジク形をしている。深さは約0.2mで底面はほぼ平坦である。西側壁に沿って幅0.6～0.8mの深さ0.1m足らずの浅い溝が巡っている。埋土は意図的に埋められたと思われ、黒褐シルト質極細砂と暗褐シルト質極細砂と地山土が混じった土である。底面は被熱しており、炭・焼土が認められる。特に東側の幅が狭い部分が強く焼けており、南側に炭層が、北側に焼土面が検出された。焼土面には円礫が多く見られ被熱している。西側にも焼土・炭が広がっているが多くはない。全体に製塙土器が出土しているが、土器は東よりも西側の方が多く出土している。SX02は南端に位置する東西に長い楕円形の落ち込みである。東西2.4m、南北1.65mで深さ0.3mを測る。遺物は出土していないが、埋土から奈良時代の範疇に入る遺構であろうと考えている。ピットが後に掘られ切り合っていることを考えると古段階になろうかと思われる。

土坑（SK01）は1基調査区中央北側で検出している。不定三角形の平面で最大長0.85mを測る。深さは0.45mで底に褐シルト質極細砂が自然堆積し、その上に円礫をぎっしりと詰めている。

ピット（SP）P23は炭・焼土を伴う被熱したピットである。長径0.55m、短径0.5mの中央に径0.2mの柱痕跡が認められ、検出面で強く焼けている。

3. 遺物

出土遺物はコンテナ8箱と少ない。土器が大半で、石器・木器・金属器が1点ずつ出土している。近世の埋土から「姫路納」と墨書きされた木札が出土しており、町内最初の木簡として注目される。土器は須恵器・土師器で量的には製塙土器が最も多数を占めている。

SH01出土土器（1～17）

1～14は須恵器で、1～8は杯蓋である。宝珠つまみを有するものであるが、4・7は残存していない。5・8も残存していないが、剥離痕が認められる。宝珠つまみの形状はボタン状のものが多く小さめである。3は上部が尖った宝珠形をしている。1は上部が凹み、2は扁平である。端部は折り返しづきのものと端部を肥厚させたものがある。叩きアリを施さないものもある。8は大形の杯蓋で叩きアリが強めで、天井部は内湾し端部は折るように下側につまみ出している。やや色調が淡いように思われる。9～13は杯で、9・11は杯A、13は杯Bである。9は平底で体部との稜線鋭い。体部は内湾し端部丸い。10は外傾する口縁部で端部丸いが尖りぎみ。11はやや焼成悪く白っぽい。僅かに内湾する口縁部で底部は不安定である。粘土紐の形状を残している。12は口縁端部を欠くが稜楕である。体部外面の稜線は甘いが明瞭である。径は大きくななく、色調は外面の方が濃い。13は内湾する口縁部で端部は残存していない。底部は中央に向かって下がっており、高台部は

短く外側に開き端部丸い。14は甕頭部である。外面は自然釉が付着し、内面にも焼成時の灰などが付着している。頭部に稜線は有さず緩やかに曲がっている。口縁部は外反ぎみで、体部は直線的に延びている。

15～17は土師器である。15は甕口縁部で磨滅顯著である。外反し端部丸く、チャートなどの砂粒多く含む。16はやや大きめの皿である。口縁部は外傾し端部丸い。平滑に表面は仕上げられているが、小石粒含んでいる。17は製塙土器で、北'成形で小石粒多く含んでいる。

SB出土土器（18～39）

18はSB01P1出土の須恵器杯で、平底から内湾ぎみに外傾する体部に続く。稜線は鋭く調整による^{ヨコ}の凹みが上部に見られる。

19～26はSB03出土である。19～23は須恵器で19～21は杯蓋である。すべて天井部を欠いているのでつまみの状況は不明である。19は内湾する天井部から直立気味に短く延びる口縁部に統き、端部は外側に反るように丸く仕上げる。20の天井部は丸く、折り返して延び端部は外反ぎみで丸い。器壁は天井部が厚くなっている。21は20と似た形状であるが全体的に薄く仕上げられている。端部の稜線甘く、重ね焼きの痕跡が残る。22～24は杯で22・23の底部は残存していない。22はやや外反する口縁部で端部丸い器高深めの杯である。高温で焼成されている。23は内湾する体部で^{ヨコ}による稜線が外面に見られる。24は直立する方形の高台が付く杯Bである。底部は平坦で体部は外傾する。器壁が厚い。25・26は土師器で、25は外反する甕口縁部である。^{ヨコ}と思われる強い^{ヨコ}で須恵器の生焼けの可能性もある。26は製塙土器で強く焼けている。2次焼成を受け、北'成形で端部角張る。砂粒含む。

27～37はSB04P7出土である。27は須恵器杯口縁部で外傾し端部丸い。28～37は製塙土器である。すべて北'成形で口縁端部は丸いものが多いが、角張るものや尖るものもある。口縁部も内湾が多いが外傾するものや端部下側で内傾するものもある。色調は2次焼成によって変化している。全体的に砂粒多く含む。31・32は内面に布目が残る。32の方が細かい布目である。

38はSB07P10出土の製塙土器である。端部下の器壁が最も厚くなってしまっており、端部丸く納めている。北'成形。

39はSB05P3出土の須恵器杯である。杯Aで丸底ぎみで体部外傾し、端部外側に尖らす。底面は未調整で砂粒含んでいる。

ピット出土土器（40～44、W1）

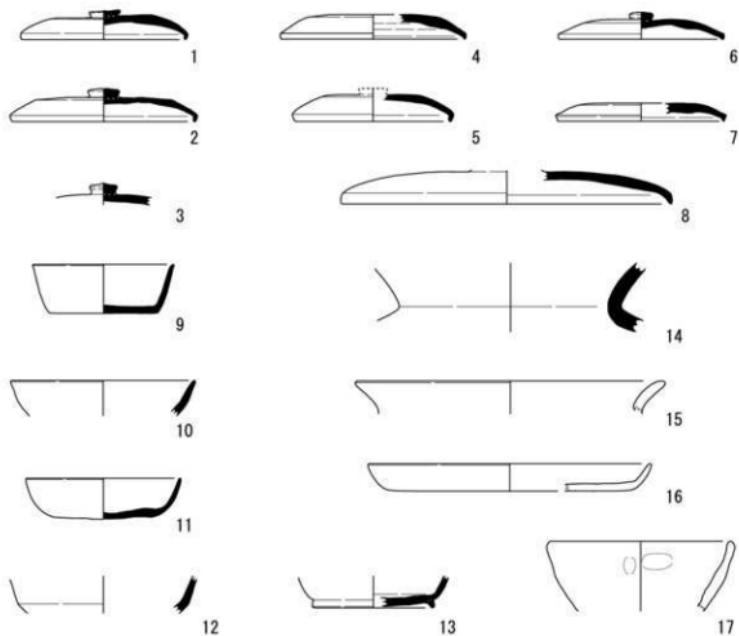
掘立柱建物に復元出来なかったピットから出土した遺物である。40・41はP9出土でSB06の空間内だが切り合い関係にある新しいピットで、SB04北側に位置している。40は須恵器杯口縁部である。内湾気味で端部尖る。41は製塙土器で底部から直線に延び僅かに開いて口縁部近くで直立気味になり端部角張る。器壁は厚く、北'成形で内面に布目が残る。細かい布目である。

42はSB05内にあり新しい時期のピットから出土した製塙土器である。端部丸くや内湾する。砂粒多く含み、北'成形である。

43はSB01東辺東側に位置するP27出土の須恵器杯蓋である。つまみ部は接合部で剥離して残存していない。天井部は平坦で稜線を有して外傾する体部に続く。

44は40・41を出土したP9に切られたP30から出土した製塙土器である。外傾し端部尖る。W1はP24新段階出土の木札である。P24はSA02南端のピットであるが、時期は異なる。中央に2.5～3mmの目釘穴が認められる。表面から打たれており、裏面が細く縦断面は三角形になる。鉄釘

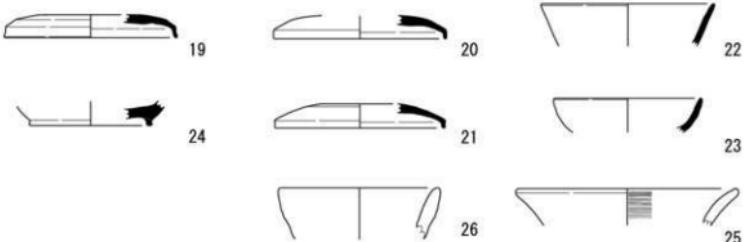
SH01



SB01



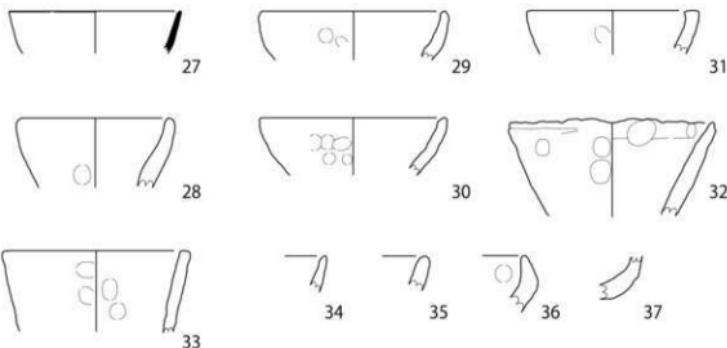
SB03



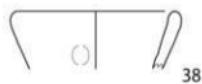
0 20cm

図 16 出土遺物実測図 (1)

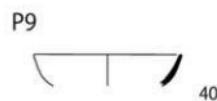
SB04 P7



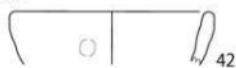
SB07 P10



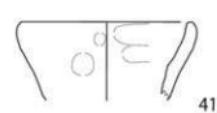
SB05 P3



P12



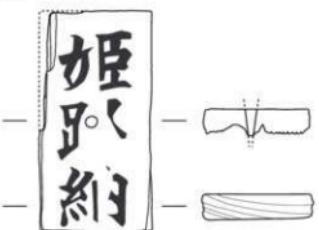
P27



P30



P24



SA01 P34

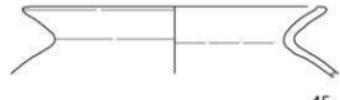


図 17 出土遺物実測図 (2)

SX01

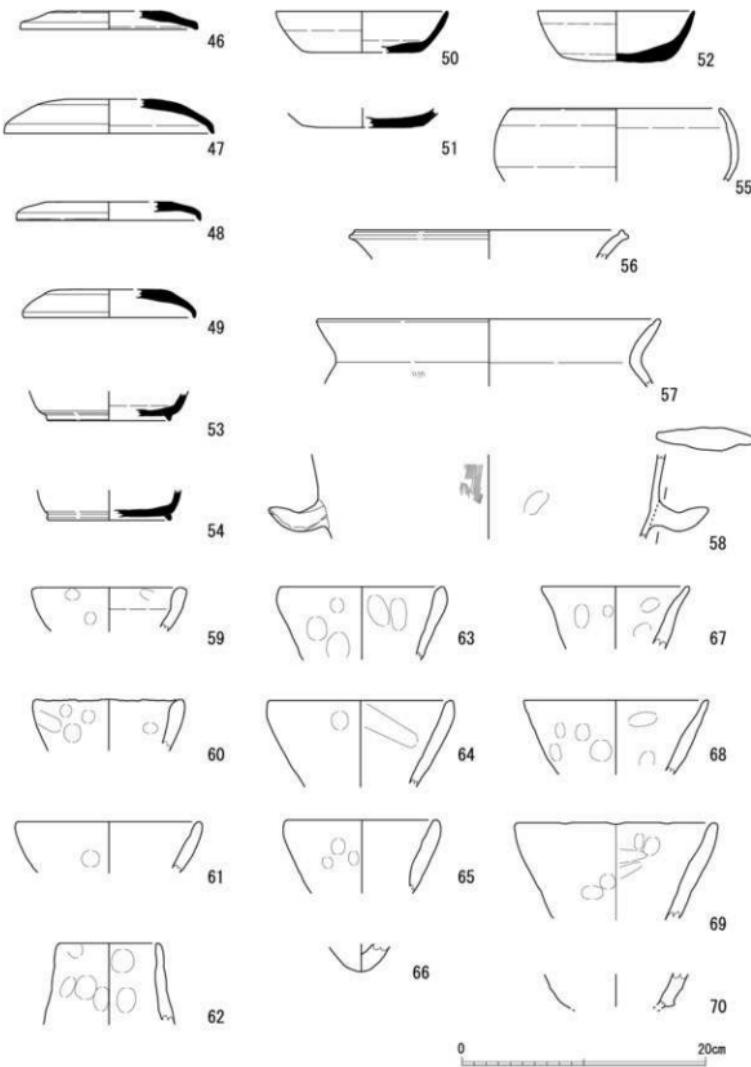
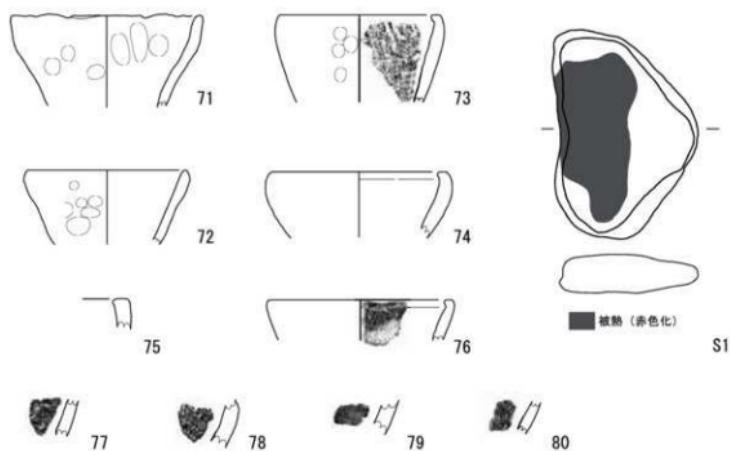


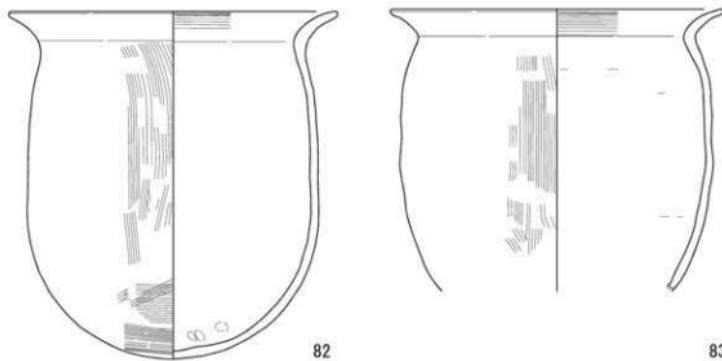
図 18 出土遺物実測図 (3)



SK01



ST01



0 20cm

図19 出土遺物実測図 (4)

が残っており裏面で曲がっている。表面では角釘に見える。板目材で木裏に「姫路納」と墨書きされている。左上を少し欠いているが、ほぼ完形で縦 9.05 cm を測る。

SA01出土土器（45）

SB01 に伴う柵と考えられる SA01 の北端柱穴から出土した土師器甕口縁部である。内湾する肩部から明瞭な稜線を有さず大きく屈曲する頸部から外傾する口縁部で、端部は内側に僅かに肥厚して面を持つ角張った端部になる。口縁部は大きめで低く外反気味に延びる。砂粒多く含み磨滅しているが、北' 成形から口縁部はヨコゲ' と思われる。口径より体部最大腹径の方が大きくなりそうである。

SX01出土土器（46～80、S1）

焼成土坑と考えられる落ち込みで多くの遺物が出土しているが、製塙土器が多いのが特徴で、遺構の性格を示している。46～54 は須恵器で、46～49 は杯蓋で他は杯身である。杯蓋はすべてつまみ部周辺の天井部を欠きつまみ部は残存していない。46 は直線的に近く外傾し端部を下方に尖らせている。47 は天井部丸みを持ち内湾し口縁端部は垂下ぎみにつまみ出す。焼成やや甘く、色調は白っぽい。48・49 は径が小さめである。48 は天井部の器壁が厚く内湾する体部で変化点があり、端部は外側につまみ出している。49 も器壁は厚めで口縁部にかけて内湾し端部下方に折り曲げ丸い。50～52 は杯 A である。50 は生焼けで平底から内湾する体部の稜線は甘い。チャートなどの砂粒多く含む。端部は丸く仕上げる。51 は底部と体部の稜線明瞭で体部は外傾し端部残存しない。52 は底部が非常に厚い。体部は内湾し端部尖る。底面には仕上げげ' が認められる。重ね焼きの痕跡残る。53・54 は杯 B で、口縁部を欠いている。形態など似通っており同一個体の可能性もある。平底に端部の丸い低い高台が付く。体部は内湾する。

55～58 は土師器である。55 は精製の鉢で、体部から口縁部は内湾し端部丸い。表面磨滅している。56・57 は甕口縁部である。56 は外反し端部内外に肥厚し、端面に 1 条の凹線を有する。砂粒多く含む。57 もくの字口縁で口縁部外傾し端部上方に尖らす。頸部内面の稜線は甘く体部も外傾する。北' 整形で内面は 2 次焼成の痕跡がある。58 は瓶把手部周辺の破片である。外傾し、外面凸整形、内面げ' 仕上げである。把手は幅広で上面から見ると三角形を呈しており、外反し端部尖っている。北' 成形で接合しており、痕跡が明瞭である。

59～80 は製塙土器である。内面に布痕が認められるものが含まれる。布目の太さには変化があり 3 種以上はあるように思われる。1 cm に 6～10 本と精粗がある。全体的に北' 成形で、布目痕があるものは端部を折り曲げるか端面になっている。口縁部は外傾するものが多いが、内傾するもの（62）や端部近くで直立するもの（71）や端部付近が内湾するもの（74）もある。71 は口縁部波状になっている。底部は 66 だけて尖り底で厚みがある。70 も底部近くで丸底になるものと思われる。65 内面の器表剥離部分の色調が変化しているので、強い被熱によって赤変したことがうかがわれる。

S1 は台石である。七種川など周辺で採取される流紋岩の円礫を使用したと思われ、上面が強く焼けて赤変している。固化していないが砥石と思われる破片も出土している。

SK01出土土器（81）

須恵器甕口縁部で体部外傾し口縁端部近くで外反し端部丸い。重ね焼きの痕跡が認められる。色調は淡く白っぽく、薄く仕上げられている。

ST01出土土器（82・83）

合口甕棺の 2 点である。82 が東側、83 が西側に位置した土器である。似た甕であるが、頸部周

辺から体部の形状が微妙に異なっている。82は完形に復元され、口径26.8cm、器高28.5cmを測る。口径が最大径で体部の最大腹で径は23.8cmで下膨れの觀があるが、体部はほぼ直立し頸部に向かって僅かに幅を狭め、頸部径は22.0cmである。口縁部は外反し端部は丸い。**北**成形のうち、内面は**円**整形を行う。体部も**北**成形のうち内面は**げ**調整、外面は粗い**円**整形で、黒斑が認められる。底部は丸く、内面には**北**成形の痕跡が残り、外面は多方向の粗い**円**整形を加える。83は底部を接合出来なかったが本来は完形であったものである。長胴甕ではあるが82と比べて丸みがあり内湾し体部が直線的ではない。口径が最大径で、口縁部は外反し端部丸い。内面は横方向の**円**整形で端部周辺は**ヨケ**仕上げである。頸部内面の稜線は比較的明瞭である。内面は粘土組の継ぎ目が見られ、チャート・長石などの砂粒多く含む。

包含層出土遺物(84~109、M1)

84~96は須恵器で84~87は杯蓋である。すべてつまみ部は残存していない。84は器高高く僅かに内湾し端部下方につまみ出している。重ね焼きの痕跡が残る。85は内湾し端部丸い。86は内湾し垂下する端部で外側に小さく反る。87は器高高く口縁部外側に開き端部反り気味に丸い。

88~94は杯である。図化した中で底部が残るものは高台を有している。88~91は口縁部で外傾するもの(88・89)と内湾するもの(90・91)があり、端部は丸い。88は肥厚気味である。すべて重ね焼きの痕跡が認められる。92~94は杯Bである。92は直立からやや内側へ傾いた短い高台で、93は短く開く断面方形の高台である。94は平底で中央が高くなっている。高台は外側に開き端部丸い。体部は外傾し端部尖り気味である。95は大形の杯底部であるが径が大きいことから別器種の可能性もある。平底で体部外傾する。96は口縁端部をわずかに欠いている鉢口縁部で内湾する。吻**け**が強く薄く仕上げられている。

97~100は土師器で、97は杯蓋のつまみ部である。ボタン状の上面が平たく天井部も平たい。98は磨滅顯著な底部である。一応杯としたが、径が小さいことや体部の角度が急であることから、小形壺底部の可能性もある。99は杯底部で不安定な平底から外傾する。100は甕頸部で内面に鋭い稜線は持たない。体部・口縁部ともに外傾し、砂粒多く含む。磨滅しているが、外面は**円**整形と思われる。

101~107は製塩土器で、面精査などで出土している。**北**成形で器壁厚く砂粒多く含んでいる。107は内面に布目が残る。

108は土師器椀底部である。ベタ高台で底面**げ**調整である。体部は外傾する。109は須恵器椀底部でベタ高台となり底面は糸切りである。体部は内湾する。

金属器は1点出土している。M1は機械掘削時に床土下で出土した銭貨である。寛永通寶で残存状態は悪いが新寛永である。

包含層

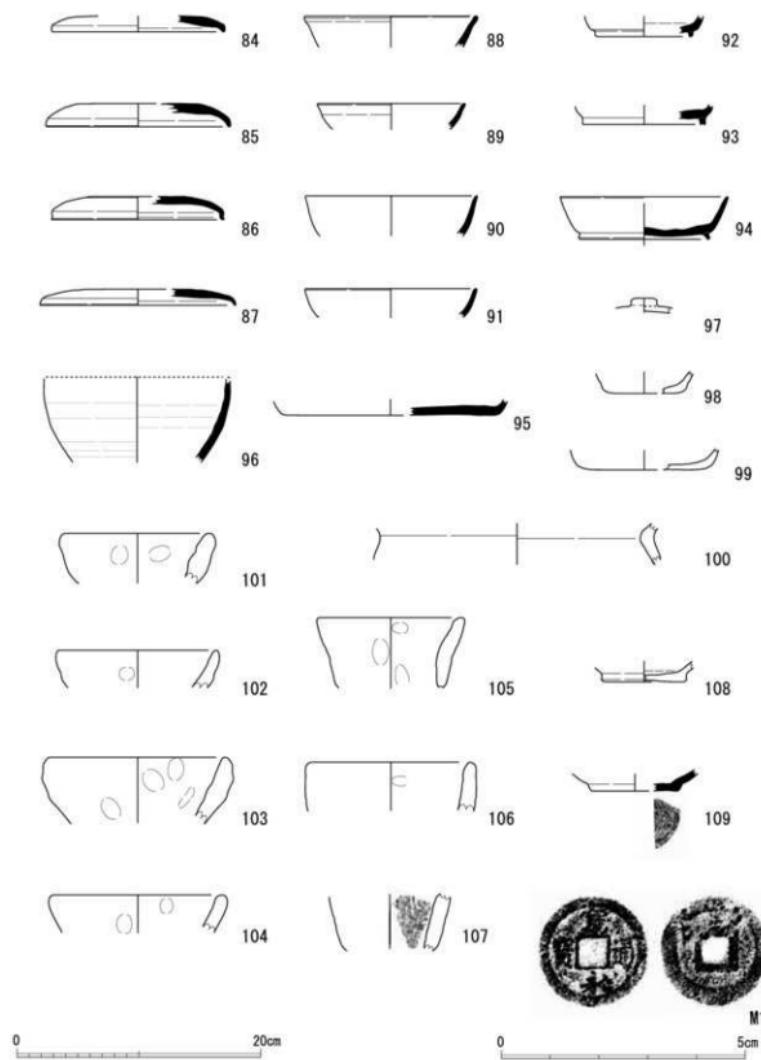


図 20 出土遺物実測図 (5)

土器觀察表

番号	種別	器種	遺構	法量 (cm)			調整		備考
				口径	器高	底径	外	内	
1	須恵器	杯蓋	SH01	13.4	2.4		ロクロナデ、ヘラケズリ	ロクロナデ	
2	須恵器	杯蓋	SH01	(15.4)	2.7		ロクロナデ	ロクロナデ	
3	須恵器	杯蓋	SH01		残1.7		ヘラケズリ	ロクロナデ	
4	須恵器	杯蓋	SH01	(15.0)	残2.0		ロクロナデ	ロクロナデ	
5	須恵器	杯蓋	SH01	(12.6)	残2.25		ロクロナデ、ヘラケズリ	ロクロナデ	
6	須恵器	杯蓋	SH01	(13.4)	2.2		ロクロナデ、ヘラケズリ	ロクロナデ	
7	須恵器	杯蓋	SH01 硬層中	(14.0)	残1.5		ロクロナデ、ヘラケズリ	ロクロナデ	
8	須恵器	杯蓋	SH01 焼土塊	(27.0)	残2.8		ロクロナデ、ヘラケズリ	ロクロナデ	
9	須恵器	杯	SH01	(11.4)	4.0	(9.0)	ロクロナデ	ロクロナデ	
10	須恵器	杯	SH01 アゼ	(15.0)	残2.9		ロクロナデ	ロクロナデ	
11	須恵器	杯	SH01 P1	(12.6)	3.35	8.6	ロクロナデ	ロクロナデ	
12	須恵器	縹楕	SH01		残3.1		ロクロナデ	ロクロナデ	
13	須恵器	杯	SH01		残2.6	(9.6)	ロクロナデ	ロクロナデ	
14	須恵器	甕	SH01		残5.7		ロクロナデ	ロクロナデ	
15	土師器	甕	SH01	(25.0)	残2.7		ヨコナデ	ヨコナデ	
16	土師器	皿	SH01	(23.0)	2.25	(20.0)	ヨコナデ	ヨコナデ	
17	土師器	製塙土器	SH01 アゼ	(14.8)	残5.7				
18	須恵器	杯	SB01 P1		残2.2	(9.0)	ロクロナデ	ロクロナデ	
19	須恵器	杯蓋	SB03 P19	(14.0)	残1.9		ロクロナデ	ロクロナデ	
20	須恵器	杯蓋	SB03 P20	(14.0)	残1.9		ロクロナデ	ロクロナデ	
21	須恵器	杯蓋	SB03 P20	(13.8)	残2.0		ロクロナデ、ヘラケズリ	ロクロナデ	
22	須恵器	杯	SB03 P18	(14.0)	残3.5		ロクロナデ	ロクロナデ	
23	須恵器	杯	SB03 P18	(12.0)	残2.8		ロクロナデ	ロクロナデ	
24	須恵器	杯	SB03 P19		残2.0	(10.0)	ロクロナデ、ヘラケズリ	ロクロナデ	
25	土師器	甕	SB03 P18	(18.0)	残2.0		ヨコナデ	ヨコナデ、ハケメ	
26	土師器	製塙土器	SB03 P20	(13.0)	残4.2				
27	須恵器	杯	SB04 P7	(14.0)	残3.5		ロクロナデ	ロクロナデ	
28	土師器	製塙土器	SB04 P7	(12.0)	残5.7				
29	土師器	製塙土器	SB04 P7	(15.0)	残4.0				
30	土師器	製塙土器	SB04 P7	(15.0)	残4.7				
31	土師器	製塙土器	SB04 P7		残3.6			布目痕	
32	土師器	製塙土器	SB04 P7	(16.6)	残8.0			布目痕	
33	土師器	製塙土器	SB04 P7	(15.4)	残6.7				
34	土師器	製塙土器	SB04 P7		残2.9				
35	土師器	製塙土器	SB04 P7		残2.8				
36	土師器	製塙土器	SB04 P7		残4.6				
37	土師器	製塙土器	SB04 P7		残3.6				
38	土師器	製塙土器	SB07 P10	(12.8)	残4.8			布目痕	
39	須恵器	杯	SB05 P3	(14.0)	4.15	(11.0)	ロクロナデ	ロクロナデ	
40	須恵器	杯	P9	(12.0)	残2.6		ロクロナデ	ロクロナデ	
41	土師器	製塙土器	P9	(14.0)	残6.4			布目痕	
42	土師器	製塙土器	P12	(16.0)	残4.3				
43	須恵器	杯蓋	P27		残1.3		ロクロナデ	ロクロナデ	
44	土師器	製塙土器	P30	(13.0)	残4.8				
45	土師器	甕	SA01 P34	(23.4)	残5.4		ヨコナデ	ヨコナデ	
46	須恵器	杯蓋	SX01	14.4	残1.5		ロクロナデ、ヘラケズリ	ロクロナデ	
47	須恵器	杯蓋	SX01	(17.0)	残2.8		ロクロナデ、ヘラケズリ	ロクロナデ	
48	須恵器	杯蓋	SX01	(15.0)	残1.5		ロクロナデ、ヘラケズリ	ロクロナデ	
49	須恵器	杯蓋	SX01	(14.0)	残2.3		ロクロナデ、ヘラケズリ	ロクロナデ	
50	須恵器	杯	SX01	(14.0)	3.4	(9.8)	ロクロナデ	ロクロナデ	
51	須恵器	杯	SX01		残1.6	(10.0)	ロクロナデ	ロクロナデ	
52	須恵器	杯	SX01	12.8	4.2	9.1	ロクロナデ	ロクロナデ	
53	須恵器	杯	SX01		残2.4	(10.0)	ロクロナデ	ロクロナデ	
54	須恵器	杯	SX01		残2.5	(10.0)	ロクロナデ、ヘラケズリ	ロクロナデ	
55	土師器	鉢	SX01	(17.0)	残6.0		ヨコナデ	ヨコナデ	

番号	種別	器種	遺構	法量 (cm)			調整		備考
				口径	器高	底径	外	内	
56	土師器	甕	SX01	(22.0)	残2.4		ヨコナデ	ヨコナデ	
57	土師器	甕	SX01	(28.0)	残5.5		ヨコナデ、ハケメ	ヨコナデ	
58	土師器	甕	SX01		残6.9		ハケメ	ユビオサエ	
59	土師器	製塙土器	SX01	(12.0)	残3.6				
60	土師器	製塙土器	SX01	(12.0)	残4.2				
61	土師器	製塙土器	SX01	(15.0)	残4.1				
62	土師器	製塙土器	SX01	(8.0)	残6.7				
63	土師器	製塙土器	SX01	(13.2)	残6.0				
64	土師器	製塙土器	SX01	(15.0)	残7.1				
65	土師器	製塙土器	SX01	(12.0)	残6.0				
66	土師器	製塙土器	SX01		残2.3				
67	土師器	製塙土器	SX01	(12.0)	残5.1				
68	土師器	製塙土器	SX01	(15.0)	残6.1				
69	土師器	製塙土器	SX01	(16.2)	残8.0				
70	土師器	製塙土器	SX01		残2.7				
71	土師器	製塙土器	SX01	(15.4)	残12.5				
72	土師器	製塙土器	SX01	(13.0)	残6.1				細かい布目痕
73	土師器	製塙土器	SX01	(13.2)	残7.2				布目痕
74	土師器	製塙土器	SX01	(14.2)	残5.5				布目痕
75	土師器	製塙土器	SX01		残2.5				布目痕
76	土師器	製塙土器	SX01	(15.0)	残3.35				
77	土師器	製塙土器	SX01		残2.9				
78	土師器	製塙土器	SX01		残4.0				
79	土師器	製塙土器	SX01		残2.8				
80	土師器	製塙土器	SX01		残2.7				
81	須恵器	楕	SK01	(17.0)	残2.8		ロクロナデ	ロクロナデ	
82	土師器	甕	ST01	26.8	28.5		ハケメ	ハケメ	
83	土師器	甕	ST01	27.0	23.1		ハケメ	ハケメ	
84	須恵器	杯蓋	西壁	(14.0)	残1.3		ロクロナデ	ロクロナデ	
85	須恵器	杯蓋		(15.0)	残1.9		ロクロナデ	ロクロナデ	
86	須恵器	杯蓋		(14.0)	残1.9		ロクロナデ、ヘラケズリ	ロクロナデ	
87	須恵器	杯蓋		(16.0)	残1.3		ロクロナデ、ヘラケズリ	ロクロナデ	
88	須恵器	杯		(14.0)	残2.6		ロクロナデ	ロクロナデ	
89	須恵器	杯		(12.0)	残2.1		ロクロナデ	ロクロナデ	
90	須恵器	杯	包含層	(14.0)	残3.3		ロクロナデ	ロクロナデ	
91	須恵器	杯	包含層	(14.0)	残2.4		ロクロナデ	ロクロナデ	
92	須恵器	杯		7.8	残1.7		ロクロナデ、ヘラケズリ	ロクロナデ	
93	須恵器	杯			残1.6	(9.8)	ロクロナデ、ヘラケズリ	ロクロナデ	
94	須恵器	杯			(13.6)	3.5	10.4	ロクロナデ	ロクロナデ
95	須恵器	杯				残1.3	(17.4)	ロクロナデ、ヘラケズリ	ロクロナデ
96	須恵器	鉢				残6.7		ロクロナデ	ロクロナデ
97	土師器	杯蓋	包含層		残1.2				
98	土師器	杯			残1.8	5.6	ヨコナデ	ヨコナデ	
99	土師器	杯				残1.6	(10.0)	ヨコナデ	ヨコナデ
100	土師器	甕	包含層	(23.0)	残3.4		ハケメ	ヨコナデ	
101	土師器	製塙土器		(12.0)	残4.1				
102	土師器	製塙土器	包含層	(13.0)	残3.1				
103	土師器	製塙土器		(14.5)	残5.4				
104	土師器	製塙土器		(14.0)	残2.1				
105	土師器	製塙土器		(12.0)	残5.8				
106	土師器	製塙土器		(13.0)	残4.0				
107	土師器	製塙土器			残4.7				布目痕
108	土師器	楕			残1.7	(7.0)	ヨコナデ、ヘラケズリ	ヨコナデ	
109	須恵器	楕			残1.4	(7.2)	ロクロナデ、底部糸切り	ロクロナデ	
W1	木製品	木籠	P24	縦9.05	横4.5	厚1.05			姫路納
S1	石製品	台石	SH01	幅17.1×11.3		厚3.1			
M1	金属器	銭貨							寛永通宝

III おわりに

桜東畠遺跡は令和2・3年度に本発掘調査を行った。調査面積は1,606 m²とさほど広くはないが多大な成果を得た。飛鳥から奈良時代の集落で、竪穴遺構1棟・掘立柱建物7棟・柵2列・木棺墓1基・土器棺墓1基・落ち込み2基・溝2条などを調査した。遺物は土師器・須恵器・製塩土器と台石・木簡・錢貨である。

地形的に興味深いのは七種川の旧河道が遺跡の南北に見られることで、遺跡の南北方向の長さが50mと確定できたことは遺跡の大きさを検討する上での好資料であろう。東西方向も同規模くらいかと思われる。狭い微高地に一定期間遺跡を営んでいたことになる。

遺構の時期は掘立柱建物の主軸方向から5期に分けられる。主軸方向は、①南北を主軸にするSB05・SB06、②N10°WのSB02、③N15°WのSB03・SB04、④N25°WのSB01、⑤N45°WのSB07の5期である。遺構で切り合い関係にあるのはSH01とSB03、SB06とSB03・SB04・SB07、SB05とSB07である。掘立柱建物の時期分類で言うと①とそれ以外で切り合い関係があることになる。出土遺物からは明確に時期判定することが出来なかったので、主軸方向から時期分類をすると①SB05・SB06・SH01・SX01、②SB02・SA02・SD01、③SB03・SB04、④SB01・SA01・ST02、⑤SB07・ST01・SD02になる。切り合い関係から①と③は時期差があるのは確実であり、⑤は45°と大きく振っているので時期差と考えられるが、②～④は微妙で同時併存でも良いかもしれない。最大5期には分けられるが、①と②～④、⑤の3期に分けておく。逆にSH01が先行する可能性がある。SB05とSB06が切り合い関係になるとすれば、SH01とSB05が古段階、SX01とSB06が新段階になる。以下の焼塩遺構とする解釈を探るならば、I SH01・SB05、II SX01・SB06、III SB02～04・SA01・SA02・SD01・ST02、IV SB07・ST01・SD02の4期に分けた方が妥当かと思われる。

掘立柱建物はSB05を除き側柱建物の南北棟である。2×3間が多く、2×5間がSB03、3×4間がSB06である。SB05だけが東西棟の可能性が高い。建物の規模は極めて大きいというわけではないが、やや大型の部類に入る建物である。柱掘り方も最大1mと大きめである。大型建物は国府郡衙や寺院などに当然多いが、香寺町から福崎町・加西市・加東市・多可町にかけての地域に比較的多く見られることが指摘出来る。

集落の規模が1方向でも確認されたのも興味深い。建物規模や遺跡の内容からして意外と小規模な集落であったことがうかがわれる。南北50mで、東西方向は未定だが西側はほぼ遺跡端部で中心部は50mくらいで、遺跡範囲は100mにはならないと推定する。短期間の特殊な性格を持った集落と考えられる。

竪穴遺構SH01は明確に上屋構造が復元出来なかったが炭化材が広がっていることから焼失住居と考えられる。床面は強い熱を受けており、亀甲状に焼土が認められ、火を伴う生産遺構と考えた。製鉄遺構の可能性を考え堆積土を確認したが磁石に反応しなかったことから、SX01と同じ性格の遺構と考えている。SX01も焼土が広く部分的に厚く堆積しており、強く火を受けた遺構である。製塩土器が多く出土していることから、焼塩遺構と考えている。早い段階から岩本正二氏は丸底Ⅲの製塩土器を焼塩土器と呼称し、生産地以外での焼塩の可能性を示唆されていた。播磨の研究者¹¹でも積極的に焼塩土器として論考を加えている。SH01・SX01はその遺構ではないかと思われる。SX01はさらにSB06と一緒に遺構ではないかと考えている。すなわちSX01は屋内炉の可能性を考えている。

類似した性格を有する遺跡として兵庫県内では神戸市北区宅原遺跡¹²が挙げられる。焼土・炭を

伴い多量の製塙土器が出土している。焼土は確認されていないが、多量の製塙土器が移動（廃棄）して出土している加東市上淹野・宮ノ前遺跡^{注3}と多可郡多可町田野口・籠町遺跡^{注4}も同様な可能性が高い。ともに井戸・溝から出土しているが、本来の性格は同じだったのではないかと思われる。また、神戸市西区出合遺跡^{注5}も律令期の各種遺物（木簡・墨書き土器・銅鏡・木製祭祀具・硯）を保有し官衙的性格を強く有する遺跡で同時期の製塙土器も多量に出土している。県外では岡山県美作市尾崎遺跡^{注6}が似ている。奈良県天理市布留遺跡も同様であるが、規模が大きく施工者のレベルが異なるものと思われる。内陸部の遺跡はともに川津の可能性があり、交通の拠点となるところである。そこから塙を再送したと思われる。それ以外にも北播磨は古代の製塙土器出土遺跡が多く、検討課題であろう。偶然かもしれないが、前述した大型建物を確認した地域とも重なり興味深い。尾崎遺跡が桜東畠遺跡と最も親縁性の高い遺跡である。鍛冶炉も検出されており、官衙的遺物も多数出土している。

集落内で墓も検出した。集落の南北端部に分かれて築かれている。北側は木棺墓、南側は土器棺墓である。土器棺墓 ST01は長胴甕2点を合わせ口にしたもので、奈良時代前後の例は県下で11例を数える。福崎町でははじめての調査例で、西播磨でもはじめての確認例である。県下では阪神間に多くの類例が見られる。芦屋市芦屋廢寺遺跡の例が桜東畠遺跡と似ている。

時期は下るが木簡出土も特記されよう。近世ではあるが、福崎町では初の木簡出土となる。「姫路納」という文字から時代を経ても桜東畠遺跡の性格を示しているように思える。当遺跡周辺が交通の拠点であったことであろう。

【注】

- 1 荒木幸治「西播磨における製塙土器の様相」『製塙土器からみた播磨』2020.2
- 2 山仲 進「宅原遺跡 豊浦地区の調査(1987年)」2002.3 妙見山麓遺跡調査会
- 3 加東都教育委員会「上淹野・宮ノ前遺跡」1992.3
- 4 宮原文隆「田野口・籠町遺跡Ⅰ」2006.3 兵庫県多可郡多可町教育委員会
宮原文隆「田野口・籠町遺跡Ⅱ」2007.3 兵庫県多可郡多可町教育委員会
- 5 鎌木義昌・亀田修一「播磨出合遺跡について」『兵庫県の歴史第22号』1986
- 6 岡山県教育委員会「尾崎遺跡」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告213』2008.3

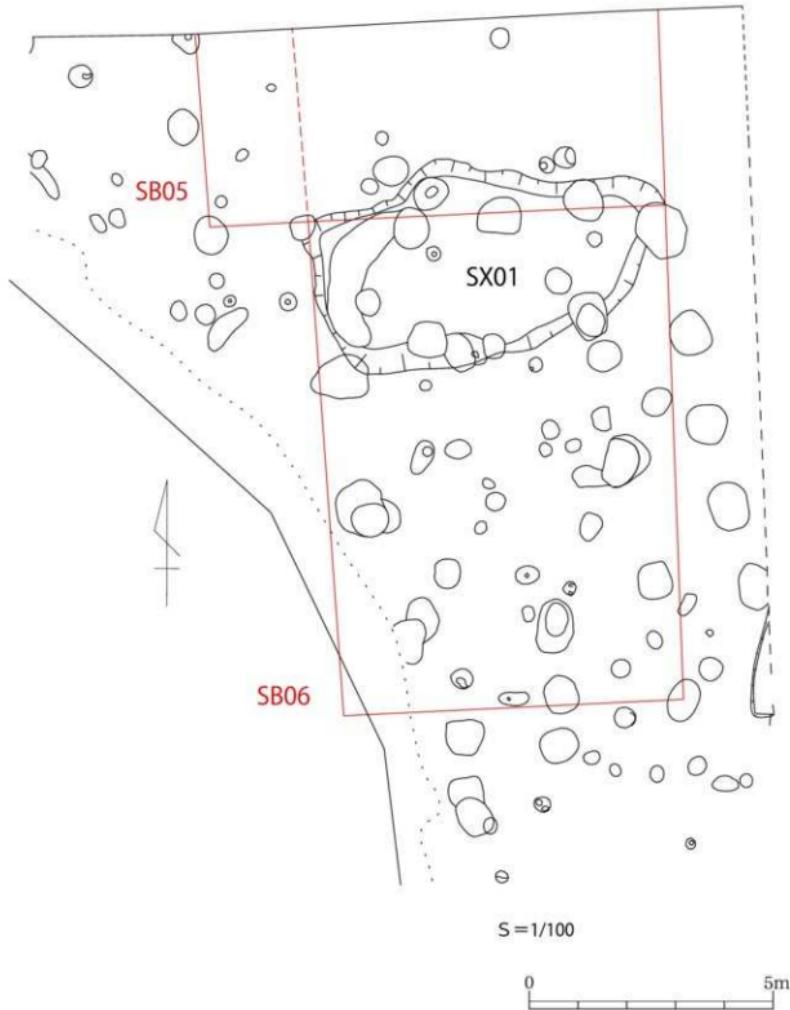


図 21 SX01・SB05・SB06 復元図

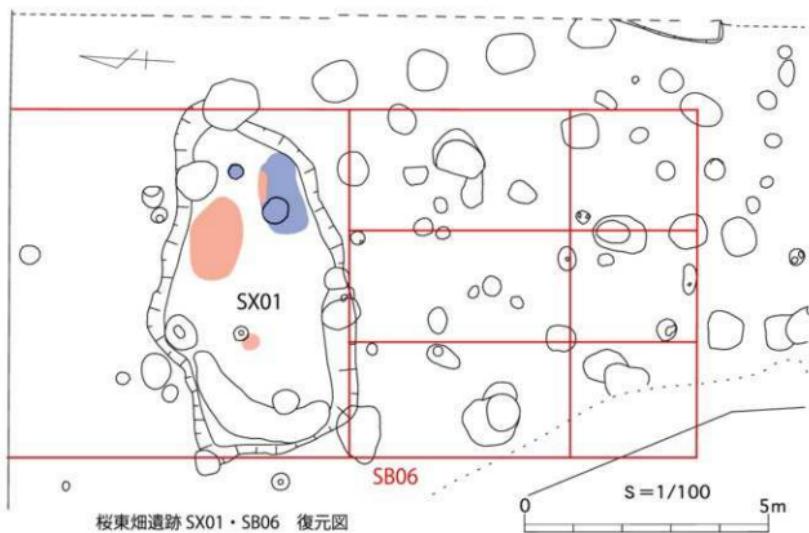
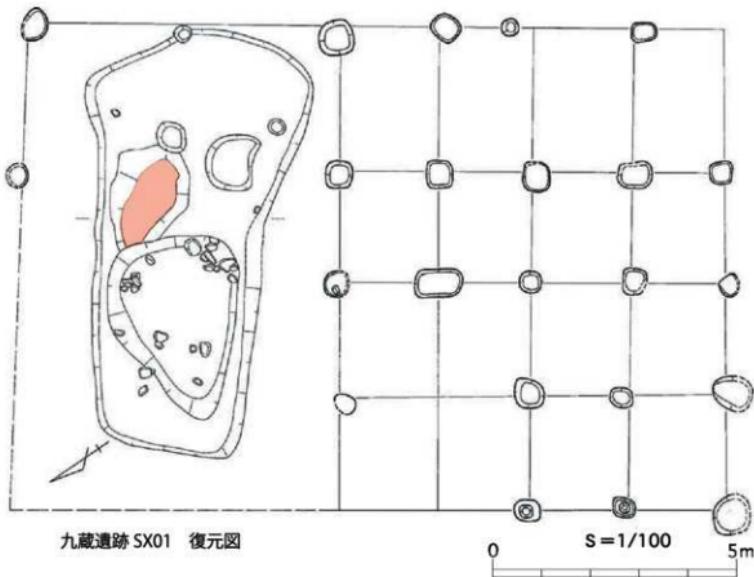


図 22 桜東畠遺跡・九藏遺跡 遺構復元図

報告書抄録

ふりがな	さくらひがしはたいせき
書名	桜東畠遺跡
副書名	高岡・福田地区は場整備事業に伴う発掘調査報告書
シリーズ名	福崎町埋蔵文化財調査報告
シリーズ番号	27
編著者名	渡辺 異
編集機関	福崎町教育委員会
所在地	〒679-2280 兵庫県神崎郡福崎町南田原3116-1 TEL 0790-22-0560
発行年月日	2022年12月28日

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所 在 地	コード		北緯度分秒	東経度分秒	調査期間	調査面積m ²	要因
		市町村	遺跡番号					
さくらひがしはた いせき 桜東畠遺跡	かんざきぐんふくさきちょうたかおか 神崎郡福崎町高岡 あざひがはた ばん 字東畠3043番ほか	28443	410146	34度56分52秒	134度45分30秒	2020年7月1日～8月30日 (実働32日間) 2021年6月22日～7月14日 (実働10日間)	1336 270	ほ場整備

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
桜東畠遺跡	集落 墓 生産	奈良 江戸	掘立柱建物 竪穴建物 落ち込み、土坑溝	土師器 須恵器 製塙土器 木簡	奈良時代の官衙的建物と土器棺墓、焼塙遺構

写 真 図 版



SH01 土器集合写真



遺跡全景（北上空から）



遺跡全景（南上空から）

図版 2



遺跡全景（東上空から）



遺跡全景（南上空から）



令和 2 年度調査区垂直写真

図版 4



令和 3 年度調査区全景（北上空から）



令和 3 年度調査区垂直写真



調査前（南から）



調査前（北から）



機械掘削



機械掘削



調査状況



調査状況



SH01 検出状況（南から）



SH01 検出状況（西から）

図版 6



SH01 アゼ（南から）



SH01 アゼ（南から）



土器出土状態



SH01（南から）



SH01 焼土面（東から）



SH01（南から）



SH01 焼土断面（南から）



調査風景



SH01（東から）



SH01（南から）

図版 8



SH01 南西部（南から）



SH01 南西部（東から）



炭化材検出状況



炭化材検出状況



西壁北半



西壁北半（旧河道堆積）



東壁南半



東壁南半旧河道堆積状況



測量風景



ドローン撮影風景



令和2年度調査区全景（北から）



令和2年度調査区全景（東から）



令和2年度調査区全景（南から）

図版 10



令和 2 年度調査区全景（北上空から）



令和 3 年度調査区全景（南から）



SB01（南から）



SB01（南から）



SB01（北から）



SB01P3 柱痕跡（南から）



SB01P5 柱痕跡（南から）



SB01P1 断割り（北から）



SB01P1 底柱痕跡（北から）



SB01P4 断割り（南から）



SB01P5 断割り（南から）



SB01P6 断割り（南から）



SB01P7 断割り（西から）



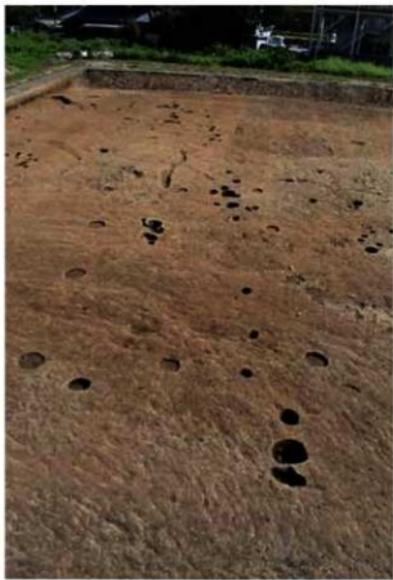
SB01P8 断割り（西から）



SB01P9 断割り（西から）



SB02 (南から)



SB02 (北から)



SB02 (南から)



SB02 (北から)



SB02P17 断割り（西から）



SB02P40 断割り（東から）



SB02P41 断割り（東から）



SB02P42 断割り（北から）



SB02P43 断割り（北から）



SB02P44 断割り（北から）



SB02P45 断割り（西から）



SB02（西から）



SB03（北から）



SB03（東から）



SB03（南から）



SB03P18 断割り（東から）



SB03P19 断割り（東から）



SB03P20 断割り（南から）



SB03P37 断割り（東から）



SB03P38 断割り（東から）



SB03P39 断割り（東から）



SB03P40 断割り（南から）



SB03P42 断割り（東から）



SB03 断割り調査風景



SB03 断割り調査風景



SB03P37 底（東から）



SB03P38 底（東から）



SB03P40 底（東から）



SB03P42 底（東から）



拡張区全景（北から）



拡張区全景（南から）



SB03P43 断割り（東から）



SB03P44 断割り（東から）



SB03P45 断割り（東から）



SB03P46 断割り（東から）



SB04 ~ 07（南から）



SB04（南から）



SB04（北から）



SB04P5 土器出土状態



SB04P5 半裁（西から）



SB04P5 調査風景



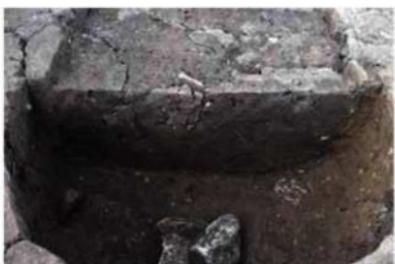
SB04P19 断面 (西から)



SB04P20 半裁 (西から)



SB03P49 断面 (南から)



SB03P50 断面 (南から)



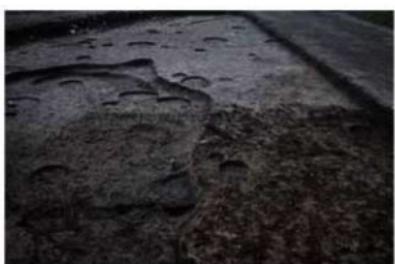
SB03P51 断面 (東から)



SB03P51 底 (東から)



SB06 (西から)



SB06 (東から)



SB04～SB07（北から）



SB05P7 断割り（西から）



P3 断割り（西から）



P9（北から）



P20 底（西から）



ST01 検出状況（南東から）



ST01 検出状況（北西から）



ST01 上層断面（南西から）



ST01 検出状況（北東から）



ST01 棺断面（南東から）



ST01（南東から）



ST01（南東から）



ST01（北西から）



ST02（西から）



ST02（南から）



ST02 調査風景



ST02 下半（西から）



ST02 下半（南から）



ST02 下半（東から）



ST02 下半（北から）



ST02 接合部



ST02 取り上げ後（北から）



令和 2 年度調査区全景 (SA01・02・SD01 南から)



SA02 (北から)



SD01 アゼ (南から)



SD01 アゼ（南から）



SK01 断面（北東から）



SK01（北東から）



P24 木簡出土状態



P24 木簡取り上げ痕跡



P23 焼土（南から）



P34 土器出土状態（南から）



SX01 調査風景



SX01 (南東から)



SX01 (東から)



SX01 と SB03 の切り合い (北から)



SX01 (西から)



SX01 (東から)



SX01 アゼ (東から)



SX01 調査風景



SX01 (北から)



SX01 と SB05 (北から)



SX02 断面（西から）



SX02（東から）



SX02（南から）



SX02 調査風景



測量調査風景



現地説明会



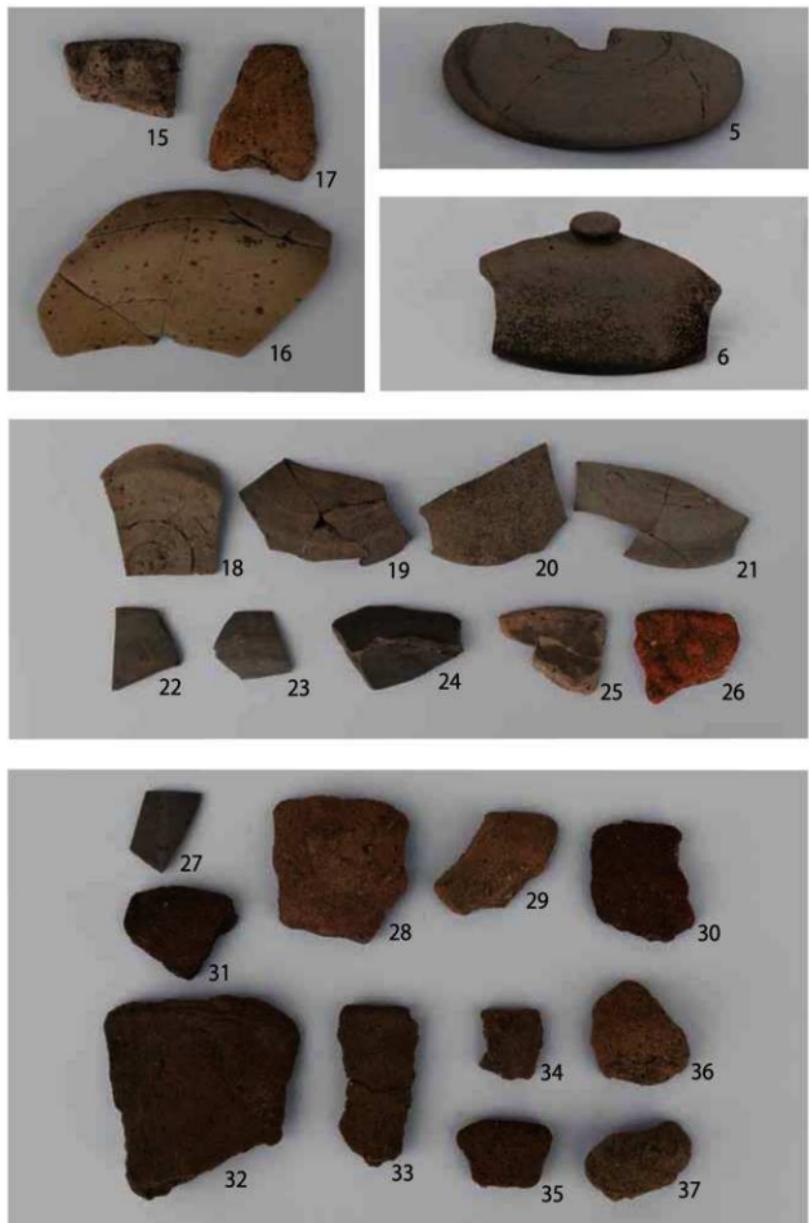
現地説明会

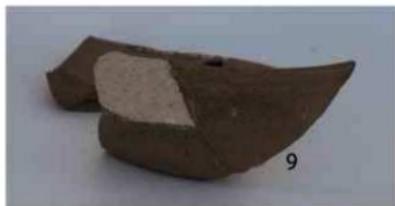


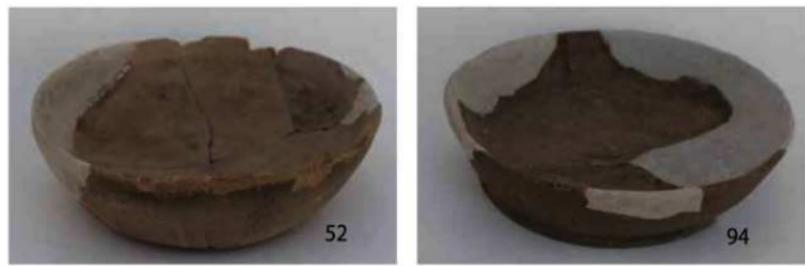
現地説明会

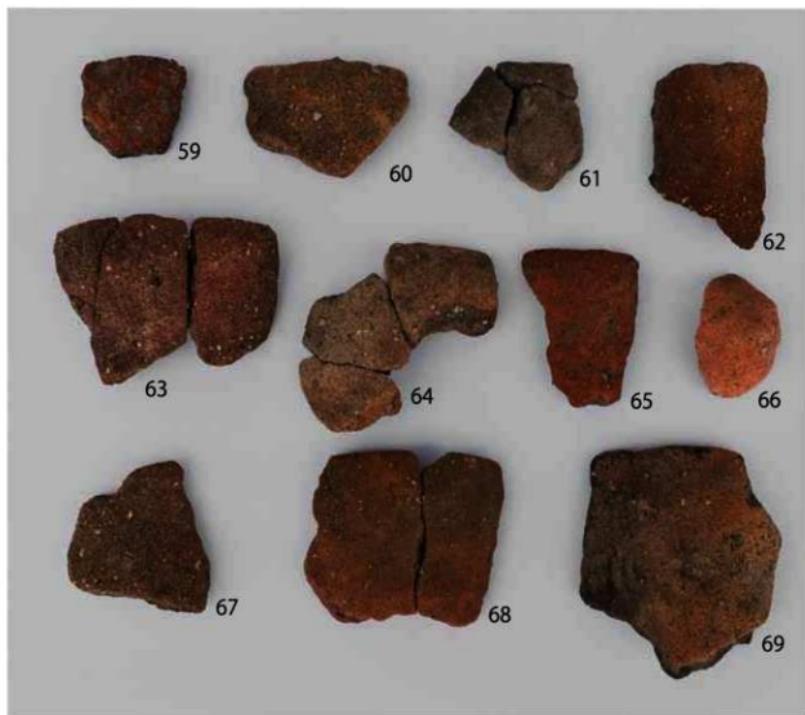


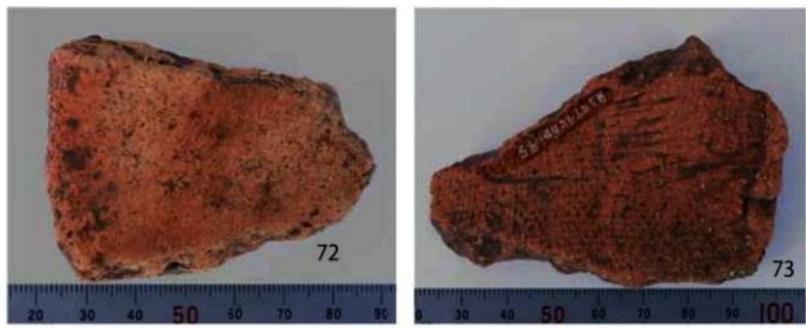
図版 30

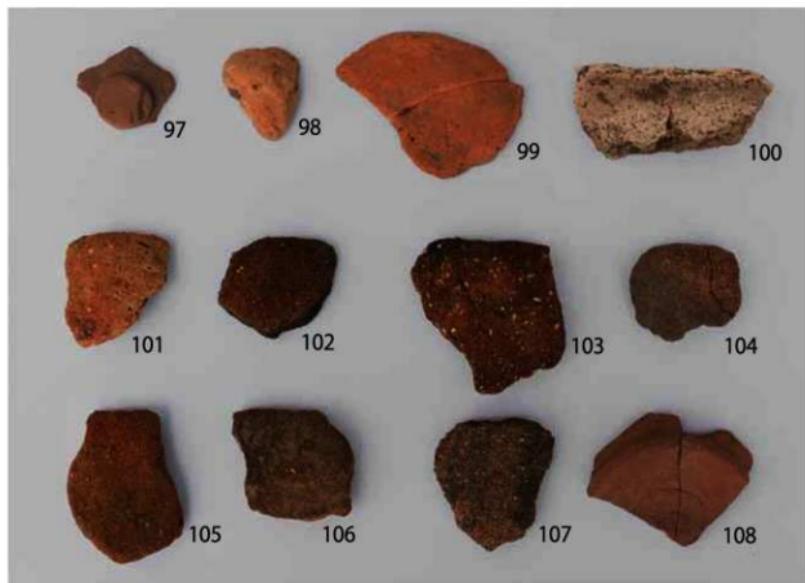




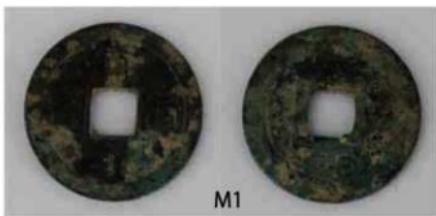
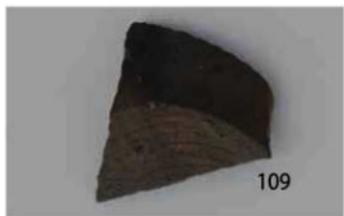








図版 36



2022年12月28日発行

福崎町埋蔵文化財調査報告書27

桜東畠遺跡

—高岡・福田地区は場整備事業に伴う発掘調査報告書—

編集 福崎町教育委員会

発行 〒679-2280 兵庫県神崎郡福崎町南田原3116-1

印刷 クリヤ印刷所